魔法先生と不死鳥

DEMIX.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生と不死鳥

【Ｎコード】
Ｎ３６８１Ｏ

【作者名】
ＤＥＭＩＸ．

【あらすじ】
魔法先生ネギま！の世界に一人の少年が作り出された。この少年は何を思いどのような成長を遂げていくのか？というストーリです。処女作なので至らない点もあるかもしれませんが、どうか楽しんでいただければ幸いです。
見てないと解らないネタ等にはそのたびに説明を入れていきます。

プロローグ？

とある家の風景

ｓｉｄｅ　３人称

一人の男が寝ていて、一人の少年が泣いている。

少年は甲斐甲斐しく男を世話している。

その様子を見ながら、男は弱弱しく少年に笑いかけながら少年の頭に手を載せる。

そして、ぽつりぽつりと少年に語りかけるように話す。
しかし、弱弱しいながらも男の目は強い輝きを持っている。

男が話し終わると少年は泣くのを必死に堪えながら男に笑いかける。

男もその少年の顔に満足そうに笑い、少年の頭に手を載せて撫でた。

その後、男の手から力が抜け少年の頭から離れる。

少年はその様子を見て笑みから泣き顔に変わり男に縋り付いた・・・。

side　out

～40年前のヨーロッパ～

side　バール

遂に完成させられる!!　俺とルリの子が!!

彼女は子供ができない体質だからって悲しい笑みを浮かべることがあったからな・・・。

名前どうしようかな・・・。

「あなた。そろそろ寝ましょう?」

「おう。見てくれ!!この子は明日できる。名前どうする?」

「私とあなたの子ができるのね?それは見てから決めましょう?」

「それもそうだな。今日は寝よう」

焦っても仕方ないしな・・・今日はもう寝ることにしよう。

～次の日～

完成した・・・！！これで彼女も喜んでくれる！！

大きいフラスコの中に胎児が入ってる。

液体の中に居るのでぷかぷか浮かんでは沈んでを繰り返している。

「ルリー！できたぞ！！」

「遂にできたのね・・・ありがとうあなた・・・」

そう言うと彼女は手で顔を覆う。

泣くほど喜んでくれるならがんばったかいがあったな・・・。

「早速だが名前を決めよう！因みに男の子だからな」

「そうね・・・でもあなたが頑張ったんだもの、あなたが決めて？」

確かに頑張ったけど別に彼女が決めたものなら文句も無かったんだ

けどな・・・
まぁそう言ってくれるなら決めてみるか！

「そうだな・・・」

悩む・・・悩むぞぉぉぉ！
全然思いうかばねぇ・・・。
こうなったら・・・！？

「ルリの名前をちょっと使ってハーリーなんてどうだ？」

これでだめって言われたら何も思い浮かばんぞ・・・。

「いいんじゃないかしら？私の名前から取ってもらえるなんて光栄ね」

ふぅ～なんとか許しを貰えた様だ。

「俺とお前の子だからな・・・元気で礼儀正しく、さらに優しい子に育って欲しいな！」

「そうね。でもきっと大丈夫よ！」

その後どういう風に教育するか思いを馳せながらハーリーを見た

プロローグ？（後書き）

こんな感じに始めてみましたがどうでしょうか？

名前の設定はおもっきしナデシコから取ってきてます（別にナデシコが関係する予定は今のところありません）

頑張っていきますのでよろしかったらこれからもよろしくお願いします。

プロローグ？（前書き）

連投です。

プロローグ？

ハーリーと名付けた少年はすくすくと成長した。

しかし、それと対比するようにルリの体調が悪くなっていき、遂には寝たきりになってしまった。

ハーリーが八歳のときである。

ｓｉｄｅ　バール

糞ッッッ！ルリの体調が日に日に悪くなっている！！

元々体が悪かったのもあるがそれでも早い！

今は取り合えずハーリーに世話をさせて俺は医者を・・・！？

「ハーリー。母さんの世話を頼むな」

「わかったよ！父さん」

ふぃ～。安心させるために笑顔を浮かべるのも疲れる・・・

でも、ハーリーが優しく思いやりのある子に育ったので助かるぜ。

そう思いながらバールは家を飛び出していった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

お母さんが病気で寝ている・・・。
いつも、笑顔を見せてくれるけど日に日に衰弱していっているのが分かる。

お父さんは医者を求めていつも駆け巡っている。
疲れているはずなのに、いつも笑顔で
「絶対に助けてもらおうな」
と、僕とお母さんに向けていっている。

僕ができることなんかたかがしれている。
「お母さん寒くない？おなかすいた？」

「大丈夫だよ」

そう言われてしまえばできることなんか無くなってしまう。

お父さんが医者を早く見つけられたらいいな・・・。

～2年後～

ｓｉｄｅ　バール

あれから医者を毎日駆け回って探したが、原因不明で治療ができないらしい
結局自分が薬を作ることにしたのだが圧倒的に時間が足りない。

不老不死の薬を作るには・・・。

「待ってろよルリ！絶対薬を作ってやる！！」

「ありがとう。でももうだめのようね・・・」

「そんな事言うな！！絶対に諦めるな！！」

「私のためにそこまで尽くしてくれる人と巡り会えて私は幸せだった・・・ハーリーをよろしくね」

そう言うと彼女は力を振り絞りバールとキスをした。
その後、彼女は力なく倒れた・・・。

「お母さん？」

「糞ッッッ！！なんで・・・なんでだよ畜生！！」

俺は、現実を否定するように叫んだが、現実は非常にも変わらない。
ハーリーも死んでしまった事が分かったようで泣き声を押し殺し、
ルリに縋り付いた。

～次の日～

ルリの葬式が静かに開かれた。
皆一様に悲しんでいる。

「ハーリー。母さんとの別れは済んだか？」

「うん。父さん」

ハーリーはあれから泣いていない。
もっと泣いてもいいと言っても

「父さんは本当に泣きたいときは泣くなって言ったよね？」

と返してくる。

確かにそうは言ったが、それでもこれは泣いてもいいって言うと、

「僕は男の子だから・・・それに泣くのは父さんのほうだよ」
と言ってきたので、ハーリーに抱きつき静かに泣いた。

まかせとけルリ！この優しくて思いやりのある俺たちの子供は絶対に大切に育てる！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　３人称

母さんの死というものを早くから経験したハーリーだが変わらず、いい子に育っていった。

しかし、彼が１５歳の姿から変わらなくなった。
更に、体がなんと雄雄しき鳥の姿に変化させることが出来るようになった。
体は真っ赤で全長２メートルほどの大きな鳥の姿である。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　バール

あの悲劇の後もハーリーはいい子に育っている。
家事など出来ない俺の変わりに頑張っている。
家庭菜園なども始めた。理由を聞くと、

「お父さんを喜ばせるため」

と答えてくれた。
本当にあれは泣けた・・・。

その後１５歳になった時に自分の体が大きな鳥になったと言っていた。
元の姿を思い浮かべたら元に戻れたと言っていたが・・・
遂に言うときが来たようだな・・・。

「ハーリー。よく聞け。ちょっと特殊にお前は”生”んだんだ」

「どういうことなの？」

「ルリが病弱だったのは知っているな？」

「うん」

「それで子供が産めない体質だったんだよ」

「え！？じゃあ僕は・・・？」

「お前を”生”むために俺たちの子種の他に不死鳥の涙を使ったんだ・・・」

「じゃあ僕は・・・」

ショックを受けているようだな・・・

でも、受け入れてくれッッッ！！

「ううん。そんな事関係ないね」

「どういうことだ？」

この後の言葉に俺は本当によかったと思えたんだ・・・。

「だって僕はバール・A・ホリックとルリ・A・ホリックの”息子”だから！」

俺はその瞬間涙腺が決壊した・・・。

その後、俺は老いることも死ぬことが無くなった最愛の彼に二つの贈り物をした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～２５年後～

父さんが老衰で動けなくなった。
医者の見立てでは今夜が父さんに残された最後の日らしい

泣くなとは言われてきたけれど押さえが利かない。

父さんは笑いながら僕の頭に手を載せてぽつりぽつりと話した。

「お前は本当に手のかからないいい子だった。
俺としてはもっと親子喧嘩したかったんだけどな・・・。
もう俺は終わりだからな。よく聞けよ？

一つ目は、あげたあれを有効活用しろよ？一人は寂しすぎるからな・・・。

二つ目は、俺の遺骨は母さんと一緒のところによろしくな？

三つ目は、この家を壊して旅に出ろ。お前は老いがないから、迫害される恐れがあるからな・・・。

その時最悪人を殺しても俺は許すからな？
旅に出ればお前はかっこいいしハーレムなんか築いちまうかもな・・・その時はちゃんと皆を幸せにしろよ？
最後に、これが俺の一番の願いだ・・・笑ってくれ。俺が幸せだったという証を見せてくれ」

そう僕に言った。
父さんはよく笑う人だったので脳裏に浮かべながら、引き攣りながらも笑顔を浮かべてみる。
父さんはそんな俺の顔に満足してくれたのか、笑顔で僕の頭に手を載せて撫でてくれた。

どれくらいたっただろうか・・・。
父さんの手が僕の頭から離れる。
もうどうしようもなかった。
泣きながら僕は父さんの体に縋り付いた。
母さんの時と同じように・・・。

その後、バールを火葬しルリと同じ墓に埋めて家を壊し荷物をまと

め旅に出た。

プロローグ？（後書き）

これでプロローグは終了です。
次はキャラ設定を書いて投稿するつもりです。

補足
この時代に火葬はないけど土葬は何かあれな感じがしたので火葬にしました。

感想などがあればお願いします。
それではこれからもよろしくお願いします。

キャラ設定（前書き）

今回はハーリーの家族設定です。

キャラ設定

本文
ハーリー・Ｂ（バーニングス）・ホリック
種族：人と不死鳥のハーフ
年齢：１５歳（見た目なので実年齢は１５０歳を超えた後に数えることをやめた）
髪：真紅で邪魔にならない程度の長さ
瞳：真紅
身長：１６３ｃｍ
趣味：人の世話、料理・お菓子作り、術式を考える

～不死鳥バージョン～
全長：２ｍから３ｍほど
体の色：殆どが真紅で形成されているが、所々オレンジなどもある
見た目：神格に満ち溢れている
補足：人を背に乗せて飛ぶ事も出来る

バールとルリの子種と不死鳥の涙を使って作られた人工生命体。
しかし、人工といっても飲み食いもできるし、子供を作ることもできるので不老不死と不死鳥化（体を鳥の状態にすること）位しか人と変わらないので、人といっても間違いではない。

顔つきはバールに似ていてかっこよさの中にあどけなさが含まれている。

本編で何度か表記したように優しく思いやることができるいい子である。
（特にルリが病弱だったためとバールに言い聞かされていたことから女性にはさらに優しい）

バールが家事に関してはからっきしだったので、大抵の事はできる。
（料理やお菓子も店で売っても売れるレベル）

ファンタジー溢れる魔法使いというよりは、錬金や物事の本質を捉えて奇跡を起こす魔術師のほうがしっくり来る。
（ネギまの世界なので魔術師という職業はないが・・・）

今後どんな魔法（魔術）を使うかや、どんな武器を使うかは追々説明するつもりである

バール・Ａ（アルク）・ホリック

種族：人間

年齢：故人

髪：茶色でハーリーと同じく邪魔にならない程度の長さ

瞳：碧

身長：１７５ｃｍ

趣味：研究、ハーリーの成長を見ること、ルリとのスキンシップ

ハーリーの父親。ルリのためを思ってハーリーを作った人物。
ルリとハーリーをこよなく愛した人物。

職業は科学者で、医療などがほとんど無い時代にハーリーを作り出したことから分かるように天才である。
その反動か家事などの行動はほとんどできない。

よく笑う人物で、周りの雰囲気をあっという間に明るくすることもできる。

ルリとは街に買い物しに行ったときに出会い一目惚れし、アタックした結果見事に結婚することができた。

ハーリーが魔法使いより、魔術師よりになった原因でもあるように、物事の本質を常に捉えようにしながら研究していた。

バールがハーリーに渡したものは不死の薬とその作り方がその一つで、もう一つは宝石で作られたペンダントである。
（ペンダントにはエンチャントとしてＬｕｃｋが上がる効果がある）

ルリ・Ａ（アクト）・ホリック

種族：人間

年齢：故人

髪：金髪で腰に届く長さ

瞳：碧

身長：１６０ｃｍ

趣味：バールとハーリーを見守ること

ハーリーの母親。
バールとハーリーをこよなく愛した人物。

病弱であまり激しいことはできないけれど、いつも優しい笑顔を見せて気持ちを安らげてくれる。

バールとは街での買い物のときに出会った。

キャラ設定（後書き）

名前考えるのがやっぱり難しい・・・
また書くべきことがあったら後書きか本文で追加していくつもりです。

王との出会いと別れ（前書き）

今回はハーリーが旅をしているときに起きた出来事とその後にできた目標について書こうと思います。
神話の時代間は分からないのでバラバラになってしまうかもしれません。
（後々ちょくちょくそのときの話などを入れるかもしれませんし）

王との出会いと別れ

これは旅に出ているときに出会った、ギルガメシュ（ギルガメッシュ）との出来事である。

ｓｉｄｅ　ギルガメシュ

なぜだ！？　なぜ我様（おれさま）の二人の友のうちの一人であるエンキドが死んでしまったんだ！！

我様達はどんなものにも勝てる王ではないのか！！

我様はまだ死ぬわけにはいかない！最近我様を理解でき、友となったハーリーと不死になるためのものを探し出してやる！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

僕は、旅先で二人の友人ができた。
二人とも傲慢だけどなかなか楽しいやつらだ。

それに二人とも物凄く強い！
ギルは武器を集めるのが好きみたいだ。たくさんの武器を持っている。

僕の正体を言っても、二人ともだから何だと言いたげだったんだよな・・・。
ギルにも神の血が入ってるからかな？

そんな楽しく暮らしていたときにエンキドが死んでしまった。
それを見たギルは不死を求めている。
僕はどうすれば不死になれるか知っている。
でもこれはたとえ友でも作り方なんかは教えない。
自分で分かるなら僕は何も言わないけど・・・。

「ハーリー！不死の薬草がある場所を見つけたぞ！！」

「あったんだ・・・早く行ってみよう！」

「もちろんだ。これで我様も完璧なる王になれる！！」

こんな会話をした後探しに行ったら一つだけあった。
しかし、手に入れた後に蛇に食べられてしまった。

案の定ギルは物凄く落ち込んで僕と国へ帰った。

～10年後～

「ハーリー。我様も遂に死ぬみたいだ・・・」

「そんな・・・まだがんばれるよ！！」

「我様のことを理解してくれる友のお前に最後の頼みだ。王の財宝（ゲートオブバビロン）を全て持っていってくれ・・・頼む！」

「・・・わかった。お前のものだ。僕がしっかり使ってあげるよ！！」

「それでこそ我様の理解者だ！！ありがとよ・・・」

ギルの瞼が落ちる・・・。
僕は静かに黙祷を奉げた。

ギルを火葬し、城の庭に墓を作り埋めた。
そして、王の財宝全てを持っていった。

その後、ギルが喜ぶようにと思い、武器や防具などを旅しながら集めて王の財宝に加えていった。

ギルガメシュの逸話

～wikiより～

ウルクの王ギルガメシュは、ウルク王ルガルバンダと女神リマト・ニンスンの間に生まれ、3分の2が神で3分の1が人間である。
更にギルガメシュは物凄く暴君である。

友であるエンキドは粘土から作り出された。力比べをして、決着がつかず、そこからなかがよくなった。

二人はメソポタミアにはない杉を求めて旅に出る。
杉はフンババ（フワワ）という怪物により守られていたが、二人は神に背いてこれを殺し杉をウルクに持ち帰った。
このギルガメシュの姿を見た美の女神イシュタルは求婚したが、ギルガメシュはそれを断った。
怒った女神は「天の雄牛」をウルクに送り、この牛は大暴れし、人を殺した。
ギルガメシュとエンキドは協力して天の雄牛を倒すが、怪物を殺したこととイシュタルへの侮辱に神は怒り、エンキドは神に作られた存在ゆえに神の意向に逆らえず死んでしまった。

ギルガメシュは大いに悲しむが、自分と同等の力を持つエンキドすら死んだことから自分もまた死すべき存在であることを悟り、死の

恐怖に怯えるようになる。
そこでギルガメシュは永遠の命を求める旅に出て、さまざまな冒険を繰り広げる。多くの冒険の最後に、神が起こした大洪水から箱舟を作って逃げることで永遠の命を手に入れたウトナピシュティムに会う。
大洪水に関する長い説話ののちに、ウトナピシュティムから不死の薬草のありかを聞きだし、手に入れるが、蛇に食べられてしまう（これにより蛇は脱皮を繰り返すことによる永遠の命を得た）。ギルガメシュは失意のままウルクに戻った。

因みにハーリーと仲がよくなったのは杉を求めて旅する前です。

王との出会いと別れ（後書き）

短い・・・文章も駄文臭いし・・・
でも神話の武器なんかは好きなんでこれは入れたかったんです！！
（こうすれば後々色々な武器が出せるゆえ）
因みに全てとは、文字通りで城すらハーリーは持って行きました。
もっと長くも書けるけど早くネギまに入りたいから短くてもどんどん上げていきます。
たくさんのアクセスありがとうございます！！
変な描写や誤字脱字など見つけたり、なにか感想があったらお願いします。
そういえば活動報告ってのを見つけたけど書かなきゃ駄目かな？

旅路の中で？（前書き）

物凄く眠い・・・でもがんばります。

旅路の中で？

友との別れを経て、いろいろな国などを旅してきた。

その旅の中で色々な経験をした。

後に英雄と称えられるものと友になったり、従者として執事などをしながら仕えたり、騙されたりもした。

ある村で崇められたり、逆に迫害されたりもした・・・あれは疲れた・・・。

そのせいか少し擦れた・・・ようだ。

言葉遣いもちょっと荒くなったし、一人称も”僕”から”俺”変えた。

複雑に思う反面、今は無きバールに近づいたようでうれしくもあるんだよね。

宿屋の布団のなかでその過程を少し思い出してみた。

～過去（オーディン編）～

ギルと分かれた後、なんか老人と出会った。
隻眼で白髪、それに槍を持ってた。

「そこのお主、こんなところで何してる？」

「僕はしがない旅人だよ。そんなことよりあなたの名前は？」

「ああ、これは悪かったな。私の名前はオーディン。お主は？」

「僕の名前はハーリーと言います。あの有名なオーディン様でしたか・・・」

え？あの巷でかなり噂されてるオーディン？
じゃああの槍グングニル？超欲しい！！
駄目元で頼んでみるか・・・。

「会って直ぐで失礼かもしれませんがオーディン様に頼みがあります」

「オーディンで良いぞ。して頼みとは？」

「ありがとうございます。それで私の頼みとはその槍のことです」

ちょっと怪訝そうな顔してるな・・・。

「その槍はグングニルではありませんか？僕は武器が好きなんで世に名高いその槍が欲しいのです！！」

「この槍か・・・確かにグングニルで合ってるぞ」

何か考えてるね～
まあ駄目って言われもしょうがないんだろうけど・・・。
でもやっぱ欲しい！！

「条件がある。さすがに今は戦争中だから戦争が終わるまではやれん。」

そしてもう一つ、と勿体付けてオーディンは言う。

「お主は色々知識を持ってそうじゃからな。我が友となりお主の知識を私にくれないか？」

え・・・友？
いやまあ嬉しいけど・・・。

「知識とはなんですか？」

「なに、私は知りたがりだからな。どんな些細なことでもいい。どうじゃ？」

そういいながらカラカラ笑う。

そんなことでいいの？
さすがに不老不死の技術は教えられないけど、そんなことであの槍が手に入って尚且つあのオーディンと友になれるなら儲けもんじゃん！！

「もちろんですよ。あの名高いオーディン様と友になれるなんて・・・」

「そうか。友ならば敬語はいらん。お主は宿無しだろう？我が城で暮らさんか？」

いや～いい人だね～
楽しそうだししばらく一緒でも良いな。

「いいよ。これからよろしく」

そんなことがあってオーディンの友達になったんだよね～

その後は本当に退屈しなかった。
本当に知識を貪欲に欲するようで、いろいろハチャメチャだった。

だって知識欲しさに首吊るような人だよ？
それに戦争もたくさん起きるから、退屈なんてしてる暇も無かったよ。
戦争に参加するって言ったときオーディンは驚いてたけど。

後楽しかったのが魔術！僕も”物”を持ち運ぶための魔術とかを取得してるけどいくらあっても困らないしね。
父さんの背中見て育ったからかもしれないけど、科学の理論考えたりするの好きなんだよね～
魔術を使うために本質を考え足り、オーディンと理論を言い合うのなんか最高だった！

オーディンも楽しんでくれてるみたいだね～
僕の料理を振舞ったら物凄く喜んでくれたよ。
知識も増やせてご満悦のようだしね。

～長い時が過ぎて～

ｓｉｄｅ　３人称

Ｒａｇｎａｒ？ｋ（世界の終わりの戦い）が今行われてる。
オーディンも自慢の槍を使い、愛馬のスレイプニルに跨り参戦している。

その最中一匹のオオカミがオーディンに襲い掛かった。
そのオオカミは普通ではなく、火すら噴いた。
オーディンはオオカミに応戦するが、たちまち飲み込まれてしまった。

ハーリーがたどり着いたときにはすでにオーディンは喰われていて、
オーディンと戦った際に深手を負ったのだろう、
フラフラになったオオカミがそこに佇んでいた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

オーディンが戦っていた場所にたどり着いたとき、そこには一匹の

オオカミが居た。

オーディンはこのオオカミに負けたのか！？
殺してやる！！　でも・・・。

ハーリーは何故か躊躇った。
憎い筈なのにフラフラなオオカミを見ていると殺すにはおしい気分になった。

何故だ！？こいつはオーディンの仇だろ！！殺して当然だ！！

ハーリーは困惑した。何故殺してはいけないと思うのだろうか・・・
さらにその誇り高さに愛おしささえ覚えた。
そんな状態で殺せるわけ無く、彼はオオカミ”フェンリル”を自分の眷属とした。

その後、落ちていたグングニルを拾い王の財宝に入れ、フェンリルを治療し従えて、いまだ終わらぬ戦争を背に旅に出た。

他にもいろいろな奴と出会ったな、と思い出しながらまどろみ、やがて静かに寝た。

今回出てきたものの説明です。またもやｗｉｋｉのｗ

～オーディンについて～

オーディン（英語：　Ｏｄｉｎ，　Ｏｄｅｎ）は、北欧神話の主神（最高神）。戦争と死の神であり、魔術の達人とされている。詩文の神でもあり吟遊詩人のパトロンでもある。知識に対して非常に貪欲な神であり、自らの目や命を代償に差し出すこともあった。

知恵と計略に長けることからローマ神話のメルクリウスと同一視された。

ローマ暦で「メルクリウスの日」にあたる水曜日をゲルマン語派で「オーディンの日」という意味の　Ｗｅｄｎｅｓｄａｙ（英語）、Ｗｏｔａｎｓｔａｇ（ドイツ語。ただし通常は　Ｍｉｔｔｗｏｃｈ（「週の中日」）を用いる）、ｗｏｅｎｓｄａｇ（オランダ語）、ｏｎｓｄａｇ（デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語）と呼ぶのはこれに由来している。

「オーディン」（Ｏｄｉｎ，　Ｏｄｅｎ）　は古ノルド語名オージン（？？ｉｎｎ、「激怒する者」の意）の英語への転写形である。

アングロサクソン人に信仰されていた時代の本来の古英語形はウォ

ーデン（??den（W?den））であり、これは現代英語にもウォウドゥン（Woden，Wodan）として引継がれている。また、ドイツ語ではヴォーダンもしくはヴォータン（Wodan，Wotan）という。

絵画などでは、片目が無く、長い白髭を持った老人で、つばの広い帽子を被り、グングニルという槍を持った姿で表される。世界樹ユグドラシルの根元にあるミーミルの泉の水を飲むことで知恵を身に付け、魔術を会得する。片目はその時の代償として失ったとされる。

また、オーディンは、ルーン文字の秘密を得るために、ユグドラシルの木で首を吊り、グングニルに突き刺されたまま、九日九夜、自分を最高神オーディンに捧げたという（つまり自分自身に捧げた）。このときは縄が切れて助かった。この逸話にちなんで、オーディンに捧げる犠牲は首に縄をかけて木に吊るし槍で貫く。なお、タロットカードの大アルカナXII「吊された男」は、このときのオーディンを描いたものだという解釈もある。

神々の世界アースガルズにあるヴァーラスキャールヴの館に住み、高座フリズスキャールヴに座り、世界を見渡している。

グラズヘイムにあるヴァルハラという宮殿に、戦死した勇者（エインヘリャル）をワルキューレによって集め、世界の終わりの戦い（ラグナロク）に備えて大規模な演習を毎日行わせるという。

ヴァルハラでの戦いにおいては、敗れた者も日没とともに再び甦り、夜は大宴会を開き、翌日にはまた戦を行うことができるとされる。

愛馬は8本足の戦馬スレイプニル。フギン（＝思考）、ムニン（＝

記憶）という2羽のワタリガラスを世界中を飛ばし、2羽が持ち帰るさまざまな情報を得ているという。
また、足元にはゲリ（＝貪るもの）とフレキ（＝飢えるもの）という2匹の狼がおり、オーディンは自分の食事はこれらのオオカミにやって自分は葡萄酒だけを飲んで生きているという。
また、トールと口論した渡し守ハールバルズの正体は変装したオーディンである。ゲイルロズ王の城を訪ねて炎の中に座らされたグリームニルもオーディンの別の姿であった。

霜の巨人のスットゥングが隠匿していた詩の蜜酒を略奪するため策略をこらした。
オーディンは、蛇に変身して蜜酒のある場所へ侵入し、蜜酒の番をしていたスットゥングの娘グンロズの前で美青年の姿になって3夜を共にした後、彼女から3口分の蜜酒を飲ませてもらった。
しかしオーディンはその3口で蜜酒の3つの容器を空にすると、素早く鷲に変身してアースガルズへ戻った。
蜜酒は詩の才能のある人間達にオーディンによって与えられることとなった。

最後は、ラグナロクにて、ロキの息子である巨大な狼フェンリルによって飲み込まれる（または、噛み殺される）結末となってしまう。

～グングニルについて～

グングニルはドヴェルグの鍛冶、イヴァルディの息子達によって作り出され、オーディン、トール、フレイに品定めされた後、オーデ

ィンへ渡された。
その穂先にはルーン文字が記されているという。また柄はトネリコで作られているとされている。

また古エッダの『巫女の予言』や『フンディング殺しのヘルギの歌』、サガの『ヴォルスンガ・サガ』などでも、槍の名前こそ明らかにされていないものの、オーディンが持つ槍について言及されている。

グングニル（古ノルド語：　Ｇｕｎｇｎｉｒ）は、北欧神話に登場する伝説の槍。日本語ではグングニール、グーングニルなどと表記されることもある。
この名前は『スノッリのエッダ』などに見られ、オーディンの所有物とされている。
この槍を投じると何者もかわすことができず、敵を貫いた後は持ち手のもとに戻るという。
また、この槍を向けた軍勢には必ず勝利をもたらすともいわれている。

投げられても絶対に持ち主の元に戻ってくるが、それは魔法的な意味ではなく兵士などが投げた後に持ってきてくれるからである。

※この作中では魔法的な意味で捉えますのでご了承ください。

～ラグナロクについて～

ラグナロク（古ノルド語：Ｒａｇｎａｒ？ｋ　（Ｒａｇｎａｒ？ｋ）、「神々の運命」の意）は、北欧神話の世界における終末の日のことである。
古エッダの『巫女の予言』、『フンディング殺しのヘルギ　その２』、『アトリの言葉』、『バルドルの夢』では、本来の形である　Ｒａｇｎａ　ｒ？ｋ　と綴られ、こちらは「神々の運命」と解される。

一方、１３世紀のアイスランドの詩人スノッリ・ストゥルルソンの『エッダ』（通称『新エッダ』）および、古エッダの『ロキの口論』では　Ｒａｇｎａｒ？ｋｋｒ（神々の黄昏）と呼ばれる。
スノッリの『エッダ』では、Ｒａｇｎａｒ？ｋｒ　と綴られることもあるが、これも「神々の黄昏」と解される。

リヒャルト・ワーグナーはこれを　Ｇ？ｔｔｅｒｄ？ｍｍｅｒｕｎｇ　とドイツ語訳して、自身の楽劇『ニーベルングの指環』最終章のタイトルとした。
このため、日本語でも「神々の黄昏」の訳語が定着している。

～フェンリルについて～

フェンリル（Ｆｅｎｒｉｒ「沼に棲む者」の意）は、北欧神話に登場するオオカミの姿をした巨大な怪物。
ロキが女巨人アングルボザとの間にもうけた３兄妹の長子である。
彼の次にヨルムンガンドが、３人目にヘルが生まれた。

神々に災いをもたらすと予言され、ラグナロクではオーディンと対

峙して彼を飲み込む。
語尾に『狼』をつけてフェンリス狼（Ｆｅｎｒｉｓ?ｌｆｒ）、フェンリスヴォルフまたはフェンリスウールヴ（フェンリル狼）とも呼ばれる。
別名にフローズヴィトニル（Ｈｒ??ｖｉｔｎｉｒ　悪評高き狼［４］）やヴァナルガンド（Ｖ?ｎａｒｇａｎｄｒ　ヴァン河の怪物）などがある。

初めは普通の狼とほとんど違いがなかったため、アース神族の監視下に置かれることとなったが、彼に餌を与える勇気があったのはテュールだけだった。
しかし、日に日に大きくなり、口から火を噴くなど力を増してきたのと、予言はいずれも彼が神々に災いをもたらすと告げたため、拘束することを決めた。

神々はフェンリルを拘束するために、レージング（Ｌ??ｉｎｇｒ）と呼ばれる鉄鎖を用意したが、フェンリルはそれを容易に引きちぎった。
続いて、神々はレージングの2倍の強さを持つ鉄鎖、ドローミ（Ｄｒ?ｍｉ）を用いたがこれもフェンリルは難なく引きちぎった。

そのため、スキールニルを使いに出してドヴェルグ（ドワーフ）に作らせたグレイプニルという魔法の紐を用いることにした。
グレイプニルは、猫の足音、女の顎髭、山の根元、熊の神経、魚の吐息、鳥の唾液という六つの材料から出来ていた。

アースの神々はアームスヴァルトニル（？ｍｓｖａｒｔｎｉｒ）湖にあるリングヴィ（Ｌｙｎｇｖｉ）という島で、紐が見かけよりも強いことをフェンリルに示し、試しに縛られるように彼に勧めた。
フェンリルはこの紐も切れないようなら神々の脅威足り得ないから解放する言われたが、一度縛られたら助けを得ることは難しいと考え、約束が間違いなく行われるという保証として誰かの右腕を自分の口に入れることを要求した。
神々の中からテュールが進み出て彼の右腕をフェンリルの口の中に差し入れた。

縛られグレイプニルから抜け出せないことに気付いたフェンリルはテュールの右腕を手首の関節のところで食いちぎったが、神々は素早くゲルギャ（Ｇｅｌｇｊａ　拘束）と呼ばれる足枷から綱を伸ばしギョッル（Ｇｊ？ｌｌ　叫び）と言う平らな石にフェンリルを縛り付け、石を地中深くに落とし、スヴィティ（？ｖｉｔｉ　打ちつけるもの）と言う巨大な石を打ち込んで綱をかける杭にした。
フェンリルは暴れてこれを噛もうとしたので、神々は下顎に柄が上顎に剣先がくるように剣を押し込んでつっかえ棒にした。
開きっぱなしになったフェンリルの口から大量の涎が流れ落ちて川となった、これはヴァン（Ｖ？ｎ　「希望」）川と呼ばれる。

こうしてフェンリルは捕縛されたもののラグナロクには自由になり、神々との戦いの場となるヴィーグリーズに進む。
その口は開けば上顎が天にも届き、鼻からは炎を噴き出しており、オーディンと相まみえて彼を飲み込むが、直ちにオーディンの息子ヴィーザルに殺される運命にある。
このとき彼は下顎を靴で踏みつけられ、上顎を手でつかまれ口から

上下に引き裂かれるとも、剣で心臓を貫かれるともいわれている。

鉄の森にいる老婆がフェンリルの一族を生み、それらのうちのスコールがソール（太陽）をハティがマーニ（月）を追いかけている。彼らから逃れるために太陽と月は馬車を走らせ、これが太陽と月の運行を司る形になっているが、ラグナロクではそれぞれソールとマーニとに追いついてこれを飲み込むといわれる。

※この作中のフェンリルは、見た目や大きさは普通のオオカミです。

旅路の中で？（後書き）

説明乙って感じですね。
まさかこんなに長いとは・・・（汗）

そういえばなにか神話の武器で使って欲しいものがあったら感想のほうにお願いします。

旅路の中で？（前書き）

感想ありがとうございました！！
いや～感想あると見られてることがよく分かるので物凄くうれしいです。
その分プレッシャーで心臓がはちきれそうですがｗｗｗ
期待に沿えるようにがんばってみたいです。
武器・盾などのほうもありがとうございます。
戦闘になったら使っていきたいと思います。自己解釈の部分や、漫画などの知識を引用することが多々あると思いますがそこは所詮二次小説ってことでお願いします。
後改善するべき点にあったので、武器や神話の説明はその場では少し説明するようにして、ある程度溜まったら別個に書くことにします。
これからもこんな武器・盾がいいなと思いましたら感想のほうにお願いします。

旅路の中で？

ｓｉｄｅ　３人称

薄暗い中で何か堅いものや刃物の打ち合う音が響く。
一人はまだあどけなさの残る少年で大小の槍を振るっている。
もう一人は青年で、一本の槍（というよりも銛だろうか）を振るっている。

打ち合う、弾く、突く、薙ぐ、避わす・・・。
その速さは普通の人では最早見えないレベルまでに達している。

二人とも顔には『喜』一色が浮かんでいる。
彼らには楽しいのだろう。打ち合うことが・・・。
例えその身が貫かれ最悪な結果になるかもしれなくとも、彼らは楽しんでいる・・・本当に愉しそうに・・・

どのくらい経っただろうか。
３０分位かもしれないかもしれない・・・はたまたもっと長い間かもしれない。
一度動きを止め青年が話しかける。少年も応じる。
青年が叫び、空中から槍を投げて地に突き刺す。そうすると少年のいる地から３０本に渡る刃が襲い掛かる。
しかし少年は大きな傷を負わずにそれを間一髪避けた。

青年はそれを見て驚き、笑った。少年は苦笑いしながら青年に向かって話しかける。
青年はその話を聞き、獰猛に笑って今度は叫びながら少年に槍を突く。
少年も叫びながら槍を突き出す。
青年の槍が少年の大きいほうの槍を弾き飛ばし、隙のできた少年に流れるように己が槍を首に突きつける。

互いに動きが止まる。
風が吹く音のみで、そこには他の音が一切存在しない場所となった。
そのまま更に時間が経過する。

そして二人は・・・己が手に持った槍を・・・。

side out

ハーリーは放浪していた。
旅するのは楽しいし、まだ会っていない人や武器などには心躍っている。
しばらく歩っていると次第に日が落ちてきた。

う～んどうするかな～・・・
あそこに明かりが見えるには見えるけれどまだちょっと遠いし・・・。
城で今日は寝ようかな？

ん？これは車輪の回る音か？蹄の音も聞こえるから馬が引いてるみたいだな。
あれはたしか・・・チャリオット（戦車）て言うんだっけ？

って！考えている間に僕の前で止まったし！？

「お前こんなとこで何してんだ？」

ｓｉｄｅ　クー・フーリン

任務の帰りで少し遅くなったな。
真っ暗になる前に帰れればいいが・・・。

ん？あれは・・・人か？見た目は少年だな。
怪しいやつには見えないが一応聞いてみるか。

「お前こんなとこで何してんだ？」

少年は吃驚している顔でこっちを見てきた。

「悪い悪い。こんな時間に何でこんなところに一人で居るのか気になったからな」

そう言うと少年は納得した顔でこっちに寄って来た。

「ちょっと旅の途中でして・・・今日はここらで野宿しようかと思ってました」

「なるほどね～それならこれに乗ってくかい？　俺の町に帰る途中だからついでいいぞ？まあお前なら夜盗の類に負けないだろうがな」

また吃驚してるね～素直なやつだな。

「何故そう思ったのですか？」

「そんな強者のオーラと神気を駄々漏らしにしてたらバレバレだぞ」

今度は罰が悪そうな顔してんな～素直な上に正直者ときたか。

今時そんな奴いないと思ってたんだがな・・・。

「そういうあなたも強者のオーラが隠れてないですよ？」

「俺はそんなん気にしてないしな。それに、それにつられて強い奴と戦えるなら儲けもんじゃねーか」

強い奴と戦えれば腕を更に磨けるしな！

「そうだ。俺の仕えている町に連れて行く代わりに俺と一死合しね～か？」

「ん～いいですよ。でも”死合”でなく”試合”でお願いします」

律儀に訂正しやがったな。言葉じゃわかんねーのに。

まあいいか。

降りて少年の前に立った。

「お前の武器はなんだ？俺はこの槍と言うよりも銛か？まあ俺は槍って思ってるからそれでいいだろ。で、お前のは？」

「僕は武器がたくさんあるからどれでもいいんだけど・・・でもあなたの槍を剣で勝てるとは到底思えないので僕も槍を使います」

「ほ～　何でそう思う？」

「まず剣であなたに挑んだら間合いに入る前に一瞬で貫かれるでしょう。例えその武器に力が宿っていたとしても・・・」

よく考えてるな。それに武器に力って言ってたな・・・てことは、

「お前何か不思議な力を宿した武器持ってるな？」

「はい。そういう武器を集めることを今は亡き友の墓前で誓いましたから。それに今あなたが見せた槍もその類のものでしょう？」

すげーな。いい観察眼を持ってやがるな・・・ん？集めてるってことはこの武器もか？

「てーとこの武器もか？」

「はい。その対象に入ります。できれば欲しいですけど、今はまだ無理そうですね」

「そーだな。この武器はまだ俺には必要なものだ・・・唐突になっちまうかもしれないが思いついたこと言ってもいいか？」

「？？もちろんいいですけど・・・なんですか？」

う～ん、これ言うのちょっとはずいな・・・。

「お前さ、俺の友にならないか？それで俺がこの槍を必要じゃなくなった時にやるけど・・・どうだ？」

お～　目がキラキラしてるぜ。これはもう答えを得たも同然だな。

「もちろんです！！これからよろしくお願いします。」

元気があっていいな。

「友になったからには名前を教えなきゃだな。俺の名前はクー・フーリン、お前さんは？」

「そう言えばそうですね。僕の名前はハーリー・B・ホッリクです」

「ハーリーね・・・了解した。じゃあ挨拶も終わったし試合を始めるか」

クー・フーリンはハーリーからいくらか距離をとり、武器を構えた。それを見たハーリーも二つの大小の槍を構えた。

「二槍か・・・それにそれどっから出した？まあいいけどな。勝敗の付け方はどちらかが降参するか、戦闘不能でいいか？」

「どっから出したかは後で教えるよ。ルールはそれでいいよ、戦闘不能になんかなりたくないけど・・・」

「ハハハ　いーじゃねーか。どうなるかわかんねーしな。合図は俺が石投げるから、それが落ちたら開始な。いくぞ！」

クー・フーリンは石を拾い真上に投げた。

石が地に落ちたとき、二つの影が交差した。

何が試合をしようだ。そんな生温い打ち合いじゃねーじゃねーか！おもしれーじゃねーか！！

それにしてもハーリーも死合を楽しんでるじゃねーか。まあ実力があるから尚更だな。攻守に躊躇いが無いから、経験が物を言っている証拠だ。

結構打ち合ったし遅くなりすぎるのも悪いからそろそろ決めるか・・・。

「ハーリー。お前不思議な武器のことを知ってるって言ったな。も

う夜が更けちまうから決めるために使わせてもらうぜ？」

「わかりました。僕は死ぬことが無いので全力でもいいですよ？」

「余裕ってことかい？」

それだったらちょいと痛い目にあってもらうが・・・。

「違いますよ。これほどの猛者にそんな余裕ありませんよ。理由は後で話しますよ」

「そうかい。じゃあ全力で行くから凌いで見せろよ！　オラッ！！」

そう言うとクー・フーリンはその場で垂直に飛翔した。

「《貫け！ゲイ・ボルグ！！》」

彼がそう言いながら地面に槍を投げて突き刺す。すると、変化はすぐに起きた。

なんとハーリーに地面から３０もの刃が襲った。

普通ならそれで貫かれて終わりだが、ハーリーは危険を察知して後方に跳んだ。

「！？　やるな！」

「危なかったですよ・・・」

苦笑しながら言ってきても説得力ないっつ～の。
決めるつもりだったんだがな・・・

「まだなんか手がありますね？」

「ほ～、分かるかい？じゃあ奥の手を使わせてもらうぜ？」

クー・フーリンは体勢を低くし、刃の部位を低く柄を高く構える。

「《穿て！　ゲイ・ボルグ！！》」

先程とは違うように叫ぶと、目で追うことのできないスピードで槍がハーリーの心臓に迫る！！
それに対抗するかのようにハーリーも叫び、大きいほうの槍を突き出す。

「《打ち破れ！　ゲイ・ジャルグ！！》」

両者の槍が接触する。
わずかに拮抗するが、ハーリーの持つゲイ・ジャルグが弾かれる。
そして、流れるようにハーリーの喉元に槍を突きつける。
しばらく静寂となる。

そして二人は槍を下げた。

「なかなかやるな！本当ならあれでお前の心臓は貫かれてるはずだったんだが・・・」

あの槍になんか特性あるのか？
槍の効果を掻き消されたみたいだが・・・。

「それはこの槍のおかげです。このゲイ・ジャルグはそういったものを完璧に発動するまでに打ち消す加護があるんです。」

なるほどね～。なかなかいい武器じゃないか。

「それにしても負けてしまいました・・・結構悔しいですね」

「ハハハ、いい勝負だったがな。これからも手合わせするだろ。そん時はどうなるかね～？さて街に向かうか！」

「それもそうですね。お願いします。クー・フーリン・・・あの・・・」

ん？なに言い淀んでんだ？

「俺の名前がどうした？」

「・・・　兄貴って呼んじゃ駄目ですか？」

・・・兄貴、ねぇ・・・俺は構わないぜ？

「いいぞ。お前が弟分か！まあ楽しそうではあるがな・・・。行くとするか」

これからどうなるかね～。まあ楽しく過ごせるだろうからいいか。

side　out

それから兄貴と日々を過ごしていった。
その時に言葉遣いの訂正をされた。

彼曰く、ダチなんだから敬語なんか使うな！！とのことらしい。
その時彼の口調を真似たら、印象が物凄く変わったらしい。
それに似合っているらしいから普段はそれでいくように言われた。

修行もできる限りやった。その時に普段考えてなかった不死鳥状態のことも特訓した。

「ハーリー。お前不死鳥なんだろ？完全とはいわないでも、修行するば本物に近づけるんじゃないか？」

と、言われたのでできることを色々模索した結果、力を強くすることと隠すこと、後、蛇足で体の大きさを変えることに成功した。

まあこの先どうなるか分からないから、あって損はないだろう・・・。

～ある日の出来事～

「ハーリー。武器を集めるのって友のためなんだろ？」

「そうだけど・・・それがどうかした？」

「いや、お前さんは武器を作らないのか？まあできないのならそれまでだが・・・」

！！それは盲点だったな。

「それは考えても見なかったな。技術を教えてもらって作るのもありだな・・・サンキュー兄貴！！」

「ただの思い付きだったんだが・・・まあ参考になったんならいいか」

兄貴はそう言って笑う。

それにしても武器か・・・あの書物を使って作るか！！

「その武器にはお目にかかれそうに無いのが残念だが・・・まあがんばれよ！」

まだ技術を持ってないのが悔やまれるけど絶対に作り出してやる！！

ｓｉｄｅ　クー・フーリン

今、俺達はアルスター王国とコノート王国の戦争に参加している。呪いでうちの軍が動けなくなってる中で俺とハーリーとフェンリルだけで奮戦している。

「クー！お前とは戦いたくなかったんだがな・・・」

「フェルディア！！引いてくれはしないんだろ？なら本気でやるだけだ！！」

糞！！親友でいい修行仲間だったんだが・・・この際四の五の言ってられない！！

会話はそれっきり無い。立ち回りがころころ変わりながら相手を殺そうと武器を向ける。

そして・・・

「クー。腕を上げたな・・・グフッ！！」

フェルディアの心臓にゲイ・ボルグが深々と突き抜け貫通している。

同情はしない。しかし、悲しむぐらいいいだろう・・・。

その時クー・フーリンの下半身が麻痺したように動かなくなる。

何！？誓約（ゲッシュ）か！？

体が動かない！？こんなところで負けるわけにはいかないんだ！！

その時近づいてきた奴が彼の持つ槍を奪い腹を貫く。

「グフッ！！この野郎！！」

彼は持っていた短剣を敵の首に突きつけ頚動脈を切る。

「糞ッッッ！俺はこんなところで死ぬのか・・・だが！！」

そうして彼はとんでもないことを行動に移した。

自分の体から零れ落ちている腸(はらわた)を体に無理やり戻し、決して倒れまいと近くにある石柱に体を括り付ける。

そして、己が愛槍を手に弟分を待つ・・・夥(おびただ)しい量の血を流しながら・・・。

side out

「兄貴ー！！どこだー！！返事をしてくれっ！！」

しばらく戦っていると兄貴がいないことに気がついた。

その後、何か嫌な予感がしたので探している。

フェンリルには違うところで戦って貰っているので自分で探すしかない。

あそこにいるのは・・・！？

「ウッ！！遅かったな・・・」

「兄貴！？その格好は？それに傷が！！」

ハーリーが彼を見たとき、明らかに致死量の血を流していた。

「俺はもう駄目だろう・・・この槍を約束通りやる。しかし条件がある。俺と誓約を交わせ」

「・・・いいぜ。誓約の内容は何だ？」

本来ならそんなこと言っていないで治療したいが彼の意思を尊重した。

この形が彼の”誇り”ならばそれに答えたいと思った。

「簡単なことだ。内容は『何時如何なる時でも俺達はダチであり、兄弟である』だ！」

「分かった。『何時如何なる時でも俺達はダチであり、兄弟である』」

兄貴は満足そうに笑いながら息を引き取った・・・。

ゲイ・ボルグを持った彼は歩き出す。相棒のフェンリルを連れて、後ろを振り返ることなく。

オーディンの時と同じように・・・。

目を開けると宿の天井が見えた。
どうやら懐かしい夢を見ていたようだ。

「武器のこと忘れてたな・・・」

寝起きの頭でそんなことをぼんやり考える。

ハーリーの一日が始まった。

旅路の中で？（後書き）

今回はちょいちょい書いてたので変なところがあったら感想のほうにお願いします。

旅路の中で？（前書き）

今回は原作キャラを出してみました。
武器も出してみます。ちょっとしか出ない上に自己解釈ですがご了承ください。

旅路の中で？

ｓｉｄｅ　３人称

少年は鉄を打つ。
一定のリズムで。
一人楽しそうに・・・。

何か口ずさむ音も聞こえる。
綺麗な声で澄んで聞こえる。
聞くものが聞けば口ずさんでいる内容も分かるだろうか・・・。

どれだけ足っただろうか・・・少年ははしゃいだ声を上げる。
手には剣のような柄に、棍棒のような形をした刀身をしたものを持っている。

色は金・黒・赤を基調としている。
禍々しくもあり、それでいて他を圧倒する神々しさすらある。

少年は外に出て剣のような物を構える。
叫びながら剣を突き出す。その後に残ったのは・・・。

side out

折角思い出したので武器を作ることにした。
道具や素材は旅で手に入っていたからな・・・。
でも俺が教わったのは普通の武器の作り方じゃない。
ギルとの思い出の品を利用した武器が作りたかったからな！！

場所はギルの城の工房。
なんでか知らんけどあったから使わせてもらう。
まぁギルは俺にこの城を譲るって言ったから別にいいだろ。壊すわけじゃねーし・・・。

え～と書物はどこだ？
あ～あったあった。これだ。

ハーリーが手に取ったのは羊皮紙でできている一つの本だった。

これはギルから譲り受けた物だしな・・・。
創り方は確か・・・媒体にその属性を付け足すために融合させる・・・だったよな？
書物なら読み上げながらだっけ？あれ？うろ覚えになってるな・・・。
俺失敗したくねーぞ。まぁ記憶力はあるほうだと自負してるから大丈夫だろ。

「e－nu－ma　e－li？　la　na－bu－？　??－ma－mu
（上にある天は名づけられておらず、）
?ap－lish　am－ma－tum　?u－ma　la　zak－rat
（下にある地にもまた名がなかった時のこと。）
ZU・AB－ma　re?－tu－？　za－ru－?u－un
（はじめにアプスーがあり、すべてが生まれ出た。）
mu－um－mu　ti－amat　mu－al－li－da－at　gim－ri－??－un
（混沌を表すティアマトもまた、すべてを生み出す母であった。）
A・ME?－??－nu　i?－te－ni?　i－?i－qu－?－??－un
（水はたがいに混ざり合っており、）
gi－pa－ra　la　ki－is－su－ru　su－sa－a　la　she－'u－?
（野は形がなく、湿った場所も見られなかった。）
e－nu－ma　DINGIR・DINGIR　la　?u－pu－u　ma－na－ma
（神々の中で、生まれているものは誰もいなかった。）」
まぁ冒頭だけでいいか。この本の本質を表してるし・・・。

基盤の鉄を打った後に魔術で書物を融合してみたんだけど・・・なんじゃこりゃ？
刀身が筒状なんだが・・・まあ先に行くにつれて細くなっちゃいるんだが・・・剣て言っていいのか？
今回色々妥協してるけどいいよな？
試してみなきゃわかんねーし。

ハーリーは城から出て、”王の財宝”から出た。
向かった先は森。試してみるためだ。

振ってみた感じただの棒だな・・・これ失敗か？
真名も開放してみなけりゃわかんねけどって俺この剣の名前付けてねーし！！
何にするか・・・本のタイトルのエヌマ・エリシュでいいか。意味は「上に」って意味だし。
なんかギルに奉げてる感じがするからな！

「《世界を乖離しろ！エヌマ・エリシュ！！》」

なんだ・・・これ・・・。
周りの物がなんもなくなったぞ！！
威力強すぎだろ。ギルの強さを見せ付けてるみたいで気分は悪くないけどな！

でもおいそれと使えねーぞこれ。切り札確定だな。
つ～かこの惨状だと人が来るぞ！？ささっと逃げねーと！！

ハーリーはその場からそそくさ逃げ出し、また旅に出た。

side　エヴァ

なんで・・・　なんで私がこんな目に遭わねばいけないのだ！

「追い詰めたぞ！化物め！」

一人の少女がたくさんの、ローブを着て杖を持った男たちに囲まれていた。
少女の片腕は半ば千切れかけており、立つ力すら残っていないのか、へたり込んでいる。

こんなところで私は死んでしまうのか！？
自分の意思に関係なく吸血鬼にされ、復讐した後にひっそりと旅しながら暮らしていただけなのに！

「私はこんなところで死ぬわけにはいかない！」

「ハハハハ！化物にはそんなこと言う権利無いんだよ！おとなしく

死ね！」

男たちが呟くと杖が光りだす。
少女にとっての文字通り死刑宣告だろ・・・。

いやだ・・・いやだいやだいやだ！！

「誰か・・・助け・・・て」

男たちが魔法を発動した瞬間、少女の前に少年が躍り出た。

「《打ち返せ！アイギス！！》」

少年の持つ盾に光が当たると、男たちに跳ね返った。

「大丈夫か？」

「お前は・・・？」

誰だ？何で助けてくれたのだ？私は化物だぞ・・・。

少年は少女の怪我を見て顔しかめた後、治癒の魔術絵をかけた。

「貴様！何をしている！そいつは化物だぞ！！」

ローブの男たちが怒鳴っている。

周りに何人か倒れているのは先程の跳ね返った魔法のせいだろうか・・・。

「貴様ら・・・生きて帰れると思うなよ！」

少年が様々な武器を持って躍り出る。

こいつは何者だ？何故私を助ける！？

私は化け物だぞ！？

前が見えない・・・私は泣いているのか？

少女は涙をこぼしながら倒れた。

張り詰めていた緊張が解け、安堵することができたからであろう。

今まで迫害されてきた少女に味方する者ができたのだ。仕方ないのだろう・・・。

少女の寝顔はとても安らかな物だった。

side out

なんか少女がリンチされてたから助けに入ったけど・・・こいつらは許せねぇ！！

「貴様ら・・・生きて帰れると思うなよ！」

こいつらはただ殺さねぇ！”王の財宝”を使って殺す！！

ハーリーが念じると一つの剣が出てきた。
ハーリーはその武器を片手に持ち男たちに踊りかかる。

「そんな剣で何が出来る！障壁を知らんのか？」

男たちが笑いあう。
しかし、その数秒後に断末魔が響くことになる。

「《切り裂け！デュランダル！！》」

ハーリーはデュランダルを上段から振り下ろし、男を障壁ごと切り裂いた。
そして、その男の首が落とされた。

「オ・・・アッ・・・？」

驚いたことに首だけになった男は音を発した。
すごい速さで両断されたために、男の脳が死んだことを知覚していないからだ。
そんなことが出来たのはハーリーの強さ故か・・・はたまた剣の鋭さ故だろうか。

その両方だろう。普通はそんなに早く切れない。人間の骨は結構丈夫だ。それを人の力で切り落とした腕前はさすがとしか言えないだろう・・・。

「貴様許さねーぞ！！みんな集まれ！こいつに一発叩き込むぞ！！」

男達は集まり詠唱を開始する。
無詠唱なので早いのだが、ハーリーにはその一瞬で十分だった。
いつの間にかその手に槌を持っていた。

「ただの的だ！《押し潰せ！ミョルニル！！》」

ハーリーの手にある槌が大きくなり、あたり一面を覆うほどの大きさになった。
雷を纏っているようで青白い線が爆ぜている。
槌をそのまま振り下ろす。
グチャッ！って音やボキッ！って耳障りな音が響き、男たちの悲鳴が辺りに響く。
しかし、すぐに何も聞こえなくなった。

ハーリーはそれを一瞥すると少女の元へ向かった。

「！？大丈夫か？・・・て寝てるな」

少女は安らかな顔をして寝ていた。

このまま放置っていうのはさすがにな・・・。
まぁ起きるまで城で寝かせるか。それに色々ありそうだしな。

ハーリーは少女を抱っこして”王の財宝”に入った。

ｓｉｄｅ　エヴァ

ここは・・・どこだ？
私はさっきまで殺されかけて・・・その後少年に助けられて・・・
どうなった？
ここはどこかの城か？ずいぶん古いつくりだが・・・。
家具は新しいから外観だけか？

「ワンッ！」

ん？これは犬・・・ではなく狼だな。
それにしてもずいぶん懐っこい・・・かわいいな！

「起きたみたいだな」

私を助けた少年が目の前に現れた・・・。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「起きたみたいだな」

何か戸惑ってるか？それに警戒と不安ってとこか。
じゃあここは

「俺の名前はハーリー。お前は？」

「・・・エヴァだ。」

会話には応じてくれるか。
まぁ一応助けたからかな？応じなかったらそこからはじめたけど手間が省けたな。

「エヴァか。じゃあエヴァ・・・飯を食おう！」

「何故私に優しくする？私は化物だぞ？」

結構苦労してるみたいだな・・・
本当はこんな事しないんだけどサービスするか。

「エヴァが言う化物とは人外のことか？じゃあ俺も化け物だな」

ハーリーはそう言うと、不死鳥の姿になった。

「なんだそれは！？只者じゃないとは思っていたが貴様神か？！」

吃驚(びっくり)してるみたいだな。まぁ当たり前っちゃ当たり前か・・・。
人間だと思っていた者が急に鳥になったんだから、驚くのも当然か。

ハーリーは元の姿に戻りエヴァに話しかける。
言い聞かせるようにゆっくりと丁寧に。

「エヴァ。これは俺の兄貴が言ったんだが、化物って言うのは理性無くして辺り構わず襲ったりする者、理性があるのに害をなす者だ。エヴァ、お前は人を襲ったか？」

「そんなことするわけないだろう！！」

優しいやつだな。力あるものは力に溺れる事が多いんだが・・・。襲われるまで手を出さないんだろうな。それなら、

「ならエヴァは化物なんかじゃねぇ！例え世界全てがお前をそう決め付けようとも、俺はお前を肯定してやるよ！」

「・・・ありがとう」

「泣くなよ。たく・・・」

ハーリーは愚痴りながらも軽く抱きしめ頭をなでてやる。

「行くのか？別に一緒に居てもいいんだぜ？」

「私にもやりたいことがあるからな。まぁお前は不死で私もそれに近い存在だ。今生の別れではあるまい？」

「まぁそう言うんなら止めねえよ。これ持ってけ」

俺が作ったペンダントだ。

可愛らしい蝙蝠型に作った自信作だ。

「貰っていこう。ありがとうな！」

「気にすんな。気を付けて行けよ！」

「また会おう」

「ああ。縁が「合ったら」、また会おう」

そう言うとエヴァは旅立っていった。

ハーリーは祈る。

彼女に幸多からんことを。

旅路の中で？（後書き）

私は他の人の小説を見させてもらっているんですが、ｆａｔｅが関係する小説にもエヌマ・エリシュって出ないんですよね。
だったら出してしまえと考えたところ武器じゃないということを知って　。。（д）←こんな感じになってしまいました。
ならば作ってしまえということで出してみました。（安直って言わないで（；；））

エヴァの口調はこれでいいんかな？まあこんな感じだと信じることにしますｗ
追記ですが狼はワンと鳴かないそうです。でも毎回遠吠えだとあれだから犬の鳴き声を入れます。

これからなんかの（おそらく小説？）キャラなどとコラボしたらナギ達との旅にしようと思っています。

誤字脱字や変に感じたところ、純粋に思ったことなどがありましたら感想にお願いします。

とある人物達との邂逅（前書き）

実況動画だったら失踪タグがつきそうな作者です。ｏｒｚ
忙しく、更新できなくていつの間にかこんなに時間が経ってしまった・・・
失踪する気はないのでこんな感じなんだなと思いながら偶に覗いていただければ幸いです。

今回はゲームである「あやかしびと」とコラボさせてみました。
時間軸？そんなのは飾りです。お偉いさんにはそれが分からんのです！！ｗ
物語の詳細はキャラ紹介や武器紹介と一緒に載せようと思います。

とある人物達との邂逅

～とある閉鎖された街にて～

「何だこの街は？」

なんかものすげー重苦しい所に来ちまったな・・・。
バリケードまでされてるし、なんかすごいのでもいるのか？
”見た感じ”普通の人たちだけだけどなんかありそうだな～こりゃ。
まぁとりあえずは歩いてリサーチしてみるか！

ｓｉｄｅ　少年

「なんだこの強大な力は！？」

「確かに、これは凄まじいですね・・・」
この私すら凌駕する力の持ち主は誰だ！？
邪悪な感じはしないが、この力は持ってるだけで脅威となる！

「どうしましょうか、御頭」

「烏、ここに連れて来てくれ。危険そうなら私が直接出向く」

「かしこまりました」

とりあえずは見てみないことには何にも分からん。

side out

別に外観は普通なんだけど眼がおかしいな。
なんでもないならあそこまで暗く淀まないはず。

「なんか空気が重いと思いませんか？」

「おや、私がいるのにお気づきでしたか・・・」

振り向くとそこには翁だが年を感じさせない人（？）がいた。
執事服に乱れ一つ無く、こちらに近づいてくる様はまるで物語に出てくる王のお付き人のような感じである。

「そんなに気をふりまいていたらわかりますよ」

「これは失礼しました。私は鞍馬の烏天狗でございます。私の御頭があなた様に来て欲しいとのことで御呼びに参りました」

烏天狗・・・ねぇ？
まあこっちに害はなさそうだし、行ってみるか。
「私の名前はハーリーと申します。そのお誘いを受けさせていただきます」

ハーリーは烏天狗の乗る車に連れられて、昔ながらの大きな日本屋敷に連れて来られた。
分からない人は歴史の教科書に載っている日本庭園（室町時代）のある場所などを思い浮かべて欲しい。

つーかこの街に合ってないような気がするんだよな～。
別にこの趣（おもむき）は嫌いじゃないから別にいいんだけど。
むしろ欲しいぐらい？でも俺には城があるし・・・むぅ

「どうか、なさいましたか？」
「！　いえいえ、いいところですね」
いかんいかん考えすぎたようだ。
ここに御頭がいるらしいから気を引き締めないと！
「ありがとうございます。ではこちらへ・・・」

しばらく歩いていると襖の部屋に通された。

「こちらで少しお持ちください。御頭を呼んできますので、どうかくつろいでいてください」

「分かりました。くつろがせて頂きます」

そうして烏天狗は出て行った。

やっぱり日本文化は最高だよな！
この畳の感じ、さらには掛けてある掛け軸からは寂しいながらも、心穏やかになる感じがｇｏｏｄ！

「ハーリー様、御頭を連れてまいりました」

やっとか・・・ってこれが御頭？

「え？ギャグ？」

「ちっっっっっがーーーーう！！私が御頭の八咫烏だ！！」

これが御頭の八咫烏？確かに力はあるけど・・・なんていうかガキ？

「烏さん。これが本当に？」

「はい。これが本当でございます」

おお！烏さんノリいいんだな！！

「お前達！”これ”とか言うなーーーーーーーーー！！」

今日も日本は平和です。

閑話休題

「こほん！お前には聞きたいことがいくつかある。まず一つ目にお前は何者だ？」

お茶を飲みながら和んでいると八咫烏が聞いてきた。それにしてもこの最中（もなか）おいしいな・・・

とりあえずはここのこと聞きたいし答えるか。

「ん～、結構難しいな。簡単に言えば神と人間の種をベースに作られた生き物・・・かな？まぁ神と人間のハーフとでもとってくれればいいと思うよ」

「神・・・か。それは鳳凰か？それとも不死鳥とか？」

お？鋭いな。しかも鳳凰と不死鳥が違う物ってこともちゃんと理解してるな。

「ご名答。俺は不死鳥の一部を使われてる。それにしてもよくわかったな、俺が鳥の神に関係があるって」

「私はそいつの先祖などを見ることができる。でもお前は鳥ということしか分からなかった。まあこれはいい。では次に、ここに何しに来た？」

そんな能力なんで持ってるんだ？まぁどーでもいいか。

「何で来たかっていうのは・・・物見遊山だな」

「お前は物見遊山にこんなところに来たのか・・・」

「そう言われてもここが気になったからな。ここはどういった場所なんだ？」

考えても分からないことは人に聞く！これができないと後で恥じかくぞ！！

「ここは神沢市といって、先祖が妖怪だったものが集まる場所だ。いや・・・集められるっていうのが正しいのかもしれない」

「先祖返りした妖怪の力を持つ人たちが厄介だから一箇所に集められた、ってとこか？」

こんな場所が日本にあったのか。

妖怪だって昔はもっと身近なものだったのにな・・・

「その通りだ。ここは日本というよりはもう一つの国みたいな扱いだ」

バチカン市国みたいな感じか？できた経緯（いきさつ）など知らんがな！

「ここがどういうところか分かった。ところで烏さんってなにか武術を嗜（たしな）んでいますか？」

なんか足捌きなどが常人のそれとは違うしな・・・

あわよくば教えてもらいたい！いくつか戦う術（すべ）は持ってるけどいくつあっても困るもんじゃないしな！

「はい。八咫雷天流というものを嗜んでおります」

「それを無理でなかったら教えて欲しいんですけど・・・」

やっぱり驚いてるな・・・。

まあ駄目で元々、略して駄目・・・これじゃ唯の駄目だ！！こほん、俺は何を考えてるんだ？

「別に構いませんが・・・御頭？」

「別に構わん。好きにしろ」

きた！ラッキー！！

「じゃあそれを身に付けることができるまでここに滞在することにするよ」

さてさて、これからどうなるかね～

～5年後～

いやいや大変だったよ～。
なんていうか教わるより慣れろって感じで・・・。
しかし、そのおかげで八咫雷天流を習得できたぜ！！

「八咫烏、それに烏さん。ありがとうございました。」

「また遊びに来い！」

「技を磨くことを忘れてはいけませんよ？」

「わかりました。また暇ができたときに寄らせて頂きます。それではまた」

なかなか楽しかったな。ちょっと街が暗いけど（苦笑）
今度はフェンリルも見せてみようかな？きっと驚くぞ！

ハーリーは次ぎ来る時の悪戯を考えながら、閉鎖された街を後にした。

とある人物達との邂逅（後書き）

修行のことはまた後で書こうと思います。
次は「バッカーノ」とでもコラボしようかなと思っています。
ハーリーは帝国と連合のどちらにつかせようかな？

乗車前（前書き）

予告通りバッカーノとのコラボです。
好きな作品なので結構長いかも（汗）
今回は冒頭部分です。

冒頭部なので一人称視点で多く書いております。
感想への返答は後書きでします。

乗車前

『とある情報屋の語り』

「おやおや、このＤＤ新聞社にどういったご用件ですか？新聞をご所望ですか？それとも情報ですか？

情報ですか・・・。それではどういった情報を？・・・・　・・・・闇に葬(ほうむ)られた『空飛ぶ禁酒屋　（フライング・プッシーフット）号事件』について・・・ですか。

ではそれに対応する情報をお持ちで？・・・　・・・了解しました。では話すとしましょう。まずこの物語話にはたくさんの人が出てきます。

それは、『列車強盗企む（意味を履き違えていますが）バカップル』だったり『議員の親子』だったり『無賃乗車』だったり『幽霊(レムレース)名乗るテロリスト集団』だったり『結婚式でもしそうな格好をした殺人鬼集団』だったり『サーカスでもしそうな不良集団』だったり『不死身の少年』だったり『魔術師のような格好をした医者』だったり様々です。更には忘れてはならない『怪物』もいます。

あぁ、後『赤毛の少年』も居ましたね。まぁそんなたくさんの人物たちが織り成すまるで螺旋階段のような物語です。全部が主人公のような存在ですから誰を主軸に話しましょうか・・・そうですね、バカップルと一緒に居た赤毛の少年達を物語の中心に持ってきましょうか。

前置きが長くなってしまいましたが話すとしましょう。そう、あれは禁酒法が存在したときの話です・・・」

～某日、某所にて～

列車乗り場の前に西部のガンマンの格好をした男と、これまた同じく西部劇ルックをした女と、他の二人に比べて普通の格好をした少年がいた。
その三人は柱の影でソワソワしながらはしゃいでいた。

「うわぁ、見ろよミリアにハーリー、俺達と同じ列車に真っ白い人が沢山乗るみたいだぞ」

「純白だね！」

「こんな列車に純白のタキシード集団っておかしくないか？」

つーかありえねーだろ。話しかけられたら逃げ出すような人相の奴らがたくさんいるぞ！？
人相で判断するのはあれだけどこいつらは纏(まと)う雰囲気が結構やばいぞ！？

「ひょっとしたら、列車の中で結婚式でもやるのかな」

「ハッピーウェディングだね！」

「人の話し聞けよ！」

絶対に聞いてないだろうな～こりゃ。
まぁ関わらなけりゃ大丈夫か。つってもアイザックもミリアも犯罪者だからなんともいえないけどな・・・。
でも犯罪者というかひょうきんもので感じなんだが（苦笑）

・
・
・
・
・

「我々はシカゴペイザージュ交響楽団のものです。楽団の楽器はデリケートですので、貨物室の中でも特に丁寧に扱って戴きたい」
黒いタキシードやドレスに身を包んだ集団が、貨物車両の横で係員に説明している。

「念のため、貨物室に楽団員を置かさせて戴きますのでよろしくお願い致します」

「え？　申し訳ありませんが、それは私の一存では・・・」
戸惑う係員に対し、交渉する男は一枚の許可証を取り出した。
「会社の方には事前に許可を戴いているのですが・・・　何でしたら、ニューヨークで厳密な身体検査を行って戴いても構いませんが」
「あ、いえ、許可が出ているのでしたら何も問題は御座いません」
それから幾つかの言葉を交わし、楽団は大きな荷物を次々と運び込

む。荷物のチェックも大箱の中身がティンパニーやホルンであることを確認して無事に終了した。
ここで出発時間がギリギリではなく、もっと厳密に貨物をチェックしていたら。あるいはこの係員がもう少し有能だったならば、気が付いていたかもしれない。
楽器の衝撃を吸収するための梱包材（こんぽうざい）の中に、大量の弾薬が含まれていたことに。二重底の下に、様々な兵器が隠されていた事に。会社の許可証が、真っ赤な偽物ということに。
だが、もし感づかれたとしても何も問題は無かった。予備手段は他にいくらでも用意してあったのだから。
こうして楽団に扮装（ふんそう）した『幽霊（レムレース）』達は、まんまと大量の装備を車内に持ち込む事に成功したのであった。

「見ろよミリアにハーリー！　楽団だ、オーケストラだ！　モーツアルトだ！　ポール・デュカスだ！」

「ベートーベンだね！」

「音楽の父・母のバッハとヘンデルもだな！」

貨物室前で楽器を積み込んでいる黒服達をみて、アイザックとミリアとハーリーが必要以上にはしゃいでいる。ハーリーは少し引っかかりを感じているが・・・

それとは対照的に、酷く心配そうに作業を見つめる男がいた。

「ど、どうしようどうしよう、なんか貨物室に見張りが入るらしいよ？」

早くも計画失敗か。ジャグジーは泣きそうな顔になってニースに訴えた。

「大丈夫だよ。私たちの狙っている貨物は、他の貨物室に積んであるみたいだから」

「で、でも・・・」

「あ、安心しろ、俺がその見張り何とかする」

胸を叩きながら張り切るドニーに対して、ジャグジーは悲鳴のような声を上げる。

「だだ、駄目駄目ダメダメだめぇ！　ドニーが何かやったら死んじゃうよ！」

「大丈夫、まかせろ。多分」

「多分じゃだめぇーッ！」

必要以上に慌てふためくジャグジーの背に、軽い衝撃が走った。
ヒッと軽い悲鳴を上げて振り向くと、そこには十歳ぐらいの少年がよろめいていた。
少年はすぐに立ち直ると、大きな刺青の入ったジャグジーの顔をまっすぐ見つめて、

「ご、ごめんなさい！よそ見してて、つい・・・」

と謝ってから、ペコリと頭を下げた。

「あ、ああ、いいっていいって。こっちこそ、こんな通路の真ん中にいたのが悪いんだから。キミの方こそ怪我は無かった？」

優しい笑顔を作る青年に対し、子供も嬉しそうに笑い返した。

「うん！　お兄ちゃん、ありがとう！」

そういってもう一度ペコリと頭を下げ、二等客室の搭乗口へと走り去って行った。

「わー、可愛いー！　ね、ね、今の子見た？　まるでジャグジーの子供のころみたい！」

「よしてよ、照れるよぉ」

「ジャグジーは今でも可愛いけどね」

「えへへ・・・よしてってば」

恥ずかしそうに顔を伏せるジャグジーに、ドニーが余計なツッコミを入れた。

「うぁ、ジャグジー。その年で、男なのに可愛い言われる、馬鹿にされてる、違うか？」

こうして再び泣きそうな顔になりながら、ジャグジーは仲間と共に三等客室へと乗り込んだ。

・

・・・・・

『幽霊』の構成員の一人であるシャーネは列車の周囲の観察をしていると、彼女の背中に突然声がかけられた。

「お客様、まもなく発車致しますが・・・何か落とされましたか？」

振り返ると、白を基調とした『フライング・プッシフット』オリジナルの車掌服が目に飛び込んで来た。この列車の異色性を示す、鉄道会社の規定から外れた白い車掌服。それを纏った若い男が、シャーネの様子を心配そうに見つめていた。

シャーネは無言のまま首を横に振り、早足に客室の中へと消えていった。

「綺麗な人だなあ。ああいう人が乗ってると思うと、俄然仕事にやる気がでてくるぞっと」

シャーネが車内に入ったのを確認し、若い車掌は腕を振り上げ大きく体を伸ばす。

「さて、出発かぁ。今日も列車に異常なしっと」

実際の状況にまるで反することを言いながら、呑気な車掌は列車の最後尾へと向かう。

これからこの列車に、如何なる運命が待っているのかも知らずに。

そして今、発車のベルは鳴り響く。

『とある情報屋の語り』

「この物語の冒頭部はこれにておしまいです。・・・　・・・　まあまだまだ先は長いので焦らずに。
そうですね、飲み物でも飲みましょうか。コーヒーと紅茶、どっちがいいですか？・・・　・・・　そうですか、わかりました。
それでは入れてきますので少々お待ちを。あぁ、くつろいでいて下さい。この先の話は疲れると思いますので。それでは・・・」

乗車前（後書き）

というわけでバッカーノ編（人気のある１９３１年です）の冒頭部です。
ぶっちゃけほとんど本編のコピペですｗハーリーは基本突っ込み、時たまボケのスタンスで行きます。
本編に入るまで時間がかかるかもしれません。（本編の内容は考え始めています）
この小説を読んでバッカーノが気になったら（後でこの小説の簡単な内容やキャラクター説明を入れますが）小説を読んでいただくもよし、漫画化されているのでそれを読んでいただくもよし、アニメ化もされているのでそれを見るもよしです。

それでは感想について
ついでに感想については個々に返事を出さずに前書きか後書きに載せようと思います。
そのほうが読んで下さっている人たちにも伝えられるからです。

紅蓮様への返信です。
アリカ姫のハーレム入りはこの小説を始める際に一度考えてみました。
しかし、どうしても本家の主人公であるネギが絡ませ難くなってしまうのでアリカ姫のハーレム入りは残念ながら無しにします。
こんな小説でも良ければまた読んでいただき感想お願いします。ｍ（＿）ｍ

アレックス様への返信です。

私はＦａｔｅ・・・というよりＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ（奈須　きのこさん）のことが大好きですから、もろに影響すると思いますｗ
希望してくださり、尚且つ他の意見は無かったので（感想無かったのでｗ）帝国√にさせて頂きます。
こんな小説の続きを気にしてくださるなんて嬉しい限りです！　本編にはバッカーノ編が終わったら入らせていただきますので、長い目で待ってくだされば幸いです。

それでは、最後にこの小説を読んでいただきありがとうございました。誤字・脱字、感想などがあったら気軽に書いてくだされば幸いです。

『空飛ぶ禁酒屋』？（前書き）

バッカーノ！編を考えていたら普通に書いていたら物凄く長くなることに気づいてしまいました。
なのでやむなくゴリゴリ削ります。それはもう掘削機ぐらい削り、尚且つポンポン飛びますｗｗｗ　あしからず
バッカーノの内容が全然分からなくなってしまいますので、前も言った様に、興味を持ったら本やアニメなどを見てもらえれば幸いです。

そういえば本文の構成で一人称と三人称が半々ぐらいだったんですけど、一人称を多く入れてみるようがんばってみます。
三人称は場面説明に主に使いたいと思っています。

『空飛ぶ禁酒屋』？

『とある情報屋の語り』

「紅茶をお持ちしました。ついでに茶菓子も。冷めないうちに召し上がってください。
それでは、話の続きでもしましょうか・・・。どこまで話しましたっけ？　・・・　・・・そうでしたね。云わば物語のプロローグにあたるところでしたね。
前にも言いましたように三人組を話の軸にして話しましょう。それでは・・・」

～列車内、食堂にて～

「おぃおぃお前ら・・・何時まで食ってんだよ・・・」

俺たちが列車に乗ってすぐにお腹が空いたらしいから食堂に来たんだが・・・何時間食い続ける気だよ・・・。
まあ美味しそうに食ってるからいいんだけどよ。

「お前ももっと食べろよハーリー。ここの飯凄く美味しいぞ、なあミリア！」

「本当だねアイザック！」

「ハァ～、確かに美味しいんだがな」

ん？向こうからなんか顔面に刺青入れた男がやってくんぞ？
刺青入れてるのに強面（こわもて）じゃねーし・・・むしろ泣き虫ってかんじだな。

「あ、あ、あのッここここ、こんにちは。あ、いや、こんばんはか。
ええと、その、すいませんごめんなさい。」

・・・なんだこれは？新手の嫌がらせか？歩いてきて椅子に座ったと思ったらいきなり謝りだしたぞ・・・。
いきなりすぎんだろこれ・・・何かこっちが悪いみたいだぞ。

「誰だ？アイザックの知り合いか？」

「いんや～知らないぞ？ミリア、ハーリーどうしよう。知らない人に突然謝られたぞ？」

知らない人かよ・・・でもこいつ堅気じゃなさそうなんだよな～。

「勝ち負けで言ったら勝ちだね！」

！？

「そうか、勝ちか！よし、よくわからないがいい勝負だった、ありがとうな！」

なんか、もういいや・・・　好きにやってくれ・・・。

「あ、あのぅ・・・・」

「それにしても兄ちゃん、すごくカッコイイな！顔面に刺青してる人なんて初めて見た！」

「カルチャーショックだね！」

「ひょっとして映画スターなのか！」

「すごおい！」

「いいやあのその、違うんです、僕はあのその、映画スターなんかじゃなくて、酒を造ったり売ったり・・・いや違います嘘ですあのその嘘です違うんです、只の不良と言うか、とにかく普通の人なんですゴメンナサイゴメンナサぃ！」

不良の時点で普通の人ではないんじゃね？酒を造ってんのか・・・法を犯してるならまとう雰囲気もなんとなく理解できる・・・泣き虫だけどな（汗）

「おいミリア、また謝られたぞ」

「二連勝だね！」

「そうかー。二回も勝たせてくれるなんて、あんた何ていい奴なんだ！」

「ひッ・・・え？」

「いい人だね！」

「ほらほら、泣かないでくれよ。いい人がなくと俺らも泣けてくる」

「もらい泣きだね！」

「お前らなに言ってんだｙ・・・マジか！　マジで泣きそうなのか？！」

吃驚(びっくり)した～、こいつらある意味凄いぞ！

「まあまあ兄ちゃん。涙を拭いて、この中華料理でも食いなよ」

「食べ放題だよ！」

「違うだろ！　奥から否定の声も聞こえてきたぞ！　人の口にもの突っ込むな！」

「美味しい・・・」

・　・
・

気が付くと、少年は涙を流していなかった。

・・・

「そこで俺はガツンと言ってやったわけよ。『南無三』ってな！」

「わあ、アイザックすごいすごい！」

「アハハハハ」

「あッ！ジャグジーが声を上げて笑うの、久しぶりに聞いたよ！」

食堂車のカウンターは、今や小さな宴会場と化していた。
何時の間にかニースも会話に加わって、食堂車の中で一際明るい雰囲気を作り出している。

「そういえばニースさん、ちょっといいですか？」

さっきのこと少し気になったからな・・・

「はい？何でしょうか？」

「いや・・・ジャグジーさんがさっき言ってた酒造ってるって言ってたのでちょっと・・・」

「！？　本当だといったらどうしますか？」

殺気を少し込めてニースはハーリーを睨んだ。
片手を服の中に入れて何か取り出そうともしている。

「そんなに殺気立たないでください。別に何もしないですよ」

「そうですか。ではそのことがどうかしましたか？」

「いやいや、なんか只の不良にしては何か纏う雰囲気が違ったので。ジャグジーさん、泣き虫のようですが目は強い意思があるように感じたので」

あいつの目は仲間のためなら強くなれる気がするからな・・・

「ハーリーさんh「ハーリーでいいですよ」　・・・ハーリーはそう感じますか？」

顔を赤らめてどうした・・・てそういうことか。

「成る程、ニースさんはジャグジーさんのことが・・・」

「？！　・・・わかりますか？」

「顔を赤くされては分かりますよ（笑）。がんばってください」

「・・・ありがとうございます」

青春してるね～。ん？ジャグジーはなにむせてんだ？

「ああッ！お兄ちゃん、また・・・ごめんなさい！」

ハーリーがジャグジーの方に顔を向けると、一人の女性と二人の男の子と女の子が立っていた。
男の子はジャグジーと既に面識があり、二回ともぶつかるシチュエーションだったようだ。

この男の子・・・なんかあるな・・・。
目が只の子供じゃない・・・更に言えばこんな目は子供には無理だ。

「ボクの名前はチェスワフ・メイエル――――」

「――――チェスって呼んで下さい。ニューヨークまで、家族に会いに行くところです」

こいつは何で少し驚いたような、怯えたような顔を一瞬浮かべた？
周りは気付いてない様だが、こいつは名前でなんかあるようだな・・・。

「私はナタリー・ベリアム、この子は娘で・・・ほら、メリー」

「メリー・ベリアムです」

ベリアム夫人に娘さんか・・・。
ニューヨークに議員に会いに行く途中か？

「お兄ちゃん、本当にごめんなさい」

「いや、いいっていいって、悪い事したわけじゃないんだからさ」
そこで突然、アイザック達が大きな声をあげた。
「そうそう、悪い事をしたんだったら、もう『線路の影をなぞる者（レイルトレーサー）』に食べられちゃってるぞ！」
「ぱっくりとね！」
「――って、昔よく親父に脅されたもんだ！」
「どっきりだね！」
「ミリア、それはドッキリとは言わねーんじゃねーのか？」
「え？れ、『路線の影をなぞる者』って、な、なあに？」
ジャグジーは何明らか作り話に泣きそうになってるんだ？
ガキじゃね～のに・・・ある意味ガキか？純粋そうではあるしな。
「なんだ、ジャグジーは知らないのか？『線路の影をなぞる者』ってのは」
・
・・・・
・
「・・・・というわけで、この話を列車の中ですると・・・その列

車にも来るんだよ――――――――『路線の影をなぞる者』がッ！」

「キャーーーーーーッ！」

「～～～～～～ッ」

「ミリア、そのわざとらしい悲鳴は何だよ・・・」

それにジャグジーはビビリ過ぎだ。

「たたた、大変だよう、消されちゃうよ！どど、どうすればいいの！」

「安心しなよ、ジャグジー。この『路線の影をなぞる者』が来ないようにする方法が一つだけあるのさ！」

「オンリーワンだね！」

「ほほ、ホント？そそ、その方法を早く教えてよ！速く早くはやくぅ！」

「おうよ！！　いいか、助かる為には・・・助かるためには、あー、助かる為にはだな」

「助かる為には・・・どうするんだっけ、ミリア」

「さあ、知らないよ？　私も初めて聞いたんだもん、そのお話」

「知らないのにあんな相槌（あいづち）うってたのかよ！？」

その後、その話を車掌から聞いたことがあると言うバーテンダーの台詞を聞き、ジャグジーは飛び出していった。

「なあミリア。ジャグジーってさ、凄くいい奴だな」

「物凄く、だね！」

「後でさ、あいつにも勝たせてやらなきゃな！」

「そうだね！」

「だから、後であいつに思いっきり謝ってやる！　二回ぐらい！」

「じゃあ、私も一回謝るね！」

「そうか！　じゃあジャグジーの三勝だな！」

「チャンピオンだね！」

・・・　お前らそのネタ好きだね・・・。もう何にも言わねーよ。

『空飛ぶ禁酒屋』？（後書き）

ずいぶんと遅くなってしまってすいません。ここのところずっと忙しかったもので・・・。
結構削ったつもりでも長くなってしまいそうです。本編を気にしてくださっている人がいるのに・・・ｏｒｚ
それでもこれは『魔法先生ネギま！』が主の小説です。（いまだにエヴァしかでていませんが・・・）
・・・コラボやネタはたくさん入れる予定ですよ？

感想や誤字・脱字、こうして欲しいなどがありましたら感想にお願いします。

『空飛ぶ禁酒屋』？（前書き）

お気に入り登録１００件突破しました！！
いや～嬉しいものですね。こんの駄文でも読んでくれている人がいるというのは励みになります。（その割りに感想無いんですけどねｏｒｚ）
こんな亀のような投稿速度ですが、楽しんで貰えれば幸いです。

『空飛ぶ禁酒屋』？

所変わって列車の最後尾の貨物室。
色々あったのよ……。これまでのことをダイジェストにしてみようと思う。

まずジャグジーが出て行った後に食堂列車に三つの歪（いびつ）が飛び込んできた。
一つ目の歪は白服を着た拳銃二丁持った男。
二つ目の歪は黒服を着た機関銃を持つ二人の男。
三つ目の歪は路地裏にでもいそうな果物ナイフを持った不良の男。
その三つの歪は次々にこう言った。

「貴様ら全員、床に伏せろ！」

「手前ら、全員手ぇ上げろ！」

「やいやいやい！お前ら全員動くなッ！」

いやいやいや、どうしろと？
それにアイザックとミリアは食いながら全部実行してるし……。大物だな……。

その後気まずそうに不良が出て行き、白服が黒服に応戦するも射殺され、黒服が勝ったと思ったら更に一つの歪が飛び込んできた。
そいつはあろう事か、素手でその二人に勝ちやがった。
一人目は近付いてきた時に手をひねり上げ、機関銃を後ろに乱射し

射殺。ここまではいい。しかし、その後の一人は殴り殺しやがった。
そのときの台詞はこうだ。

「んー？大丈夫大丈夫、ピート・ハーマンよりは全然弱いから」

「ジャック・ジョンソンやジャック・ディンプシーみてえなパンチ力もテクニックもねえ」

「なんだろうなぁ、ジャックって名前はボクサーにとって縁起でもいいのか？なあ」

「ハーマンとかディンプシーって普通に話しちまってたけどよ、お前はボクサーの名前解る？解るよなぁ、アメリカ国民なら知ってて当然だ」

「知らないとか言ったらゆるさネエ」

「ゆるさねえ」

「絶対に」

「許しは」

「しねえ」

「まあ」

「別に」

「知っててて」

「許しゃぁ」

「しないん」

「だけどな？」

……どうよ？しかも、この会話と会話の間に一回ずつ殴ってんだぜ？
それで壁まで追い詰めた時の台詞が

「あー、やっとナイフを落としてくれたか。いやー、怖くて怖くて、つい殴りすぎちまったよ」

何をいけしゃあしゃあと……。でも、こういう奴が強い信念持ってるんだよな～。

その後白服の仲間が来て一緒に出て行ったよ。
それで、その緊張空間で間抜けな声が響いた。

「なあミリア、いつまでこうしてりゃいいんだ？なんかさっきから上で銃声とか怖そうな人の声とか聞こえて、その、ドキドキなんだが」

「ホラーショウだね！」

「それにあれだ、この状態、かなり辛いんだけどよ」

「正直、辛いね！」

これが一つ目の出来事。
二つ目の出来事はおっさんのクレームだった。
いやこの恰幅のいいおじさ……だめだ、正直に言おう。豚だ！あんなんどうして生きてんだよって感じのな！！
そのときの台詞がこれだ。

「大体何だこの食堂車は！黄色い猿や田舎臭いアイリッシュを厨房に入りびたらせよって！」

「こっちは高い金払ってこの列車に乗っているのだぞ！　なんだその面は。わしに文句があるのなら金を返せ！」

いや死ねよ。なんでこの世に存在してんの？
その時、アイザックが札束を豚に渡してこう言った。

「これでいいのかよ！えーとこの……嫌な奴め！」

「最悪だね！」

こいつら本当にいい奴だよな。この時勢に金を誰とも知らない豚に上げるなんて……。

「な、何だ貴様ら」

「金なら俺が代わりに返してやるよ！だからお前はもう客じゃねえ！そうだよな、ミリア、ハーリー」

「無賃乗車だね！」

「確かにそうだな」

「馬鹿が、一体わしを誰だと……」

文句を言うなら札束に手を伸ばしてんじゃねーよ。
さらに喚く豚に札束を豚に投げつけて

「とっととどっか行っちまえ！でないとあれだ、俺の百丁……いや、億丁拳銃が火を噴くことになるぞ！」

「蜂の巣だね！」

って叩きつけたよ。まあ銃がどこにあるのかは置いといて、格好よかったぜ。
その後コック長の台詞が重く響いてきた。

「ヨウン！ファン！聞いたろう！そいつはもう乗客でもうちの厨房の客でもねえ！とっととここから出て行ってもらえ！」

「あいヨー、コック長ー」

「面倒くさい……」

コック長カッコイイな！それでその追い出す係りを俺が引き受けたぜ。だってただ出すだけじゃ……ねぇ？

「ああ、ヨウンさんにファンさんでしたっけ？その豚追い出すの俺にやらせてください」

「いいヨー、だけど気を付けてネー」

「こんなこと良くやりたがるな」

「いや、ちょっと……」

俺はそのまま豚の服の襟首つかんで引きずっていったよ。こいつ何キロあるんだよ！

それで、食堂車から出た後のやり取りがこれだ。

「離さんか！　このガキ！　服が汚れる！」

「誰が喋っていいって言った。そんなことよりさっき渡された金を出せ」

「何言っとるこのガキ！早く離……」

「五月蠅（うるさ）い、早くしろ」

腕に持ってたナイフ突き立ててやったよ。

こんな豚の血が服に付かない様にやったぜ。反吐が出る……

「ギャアァァァァァ！」

「喚（わめ）くな、早くしろ」

やっと出しやがったこいつ。どんだけ薄汚ねーんだよ。

「ご苦労、あとはどうにでもしろ」

「ままま、待ってくれ！　こっち側にはあの、白服の奴がいるんだぞ！　頼む！　中に入れてくれ！」

「大丈夫だ。あいつらの中には田舎臭い奴も黄色い猿もいなかったみたいだからな。仲良くやることだ。入ってきたら生まれてきたことを後悔させてやる」

そう言って放置してやったよ。スカッとしたぜ！

「おいおい悲鳴が聞こえてきたぞ？」

「大丈夫カ？」

「大丈夫ですよ、ヨウンさんにファンさん。あ、それとこの金、落ちてたんで俺たちの食事代にしといてください」

「これってまさか、さっきの……」

「いえいえ、僕は”拾い”ましたよ」

「……。そうか、そうだよな」

いや～理解力のある人で助かる。

「あ、お帰り！それにしてもあれだ、ここのシェフは強そうだな！」

「最強伝説だね！」

「意味が解んねえぞ～。そうだ、アイザック。さっき金が落ちてたからこれお前に渡せという神のお告げだろ」

「おお！　なんかよくわかんねえがありがとよ！」

「ラッキーだね！」

こうすれば受け取ると思ったからな。しかし、疑問を持たないのか？（苦笑）

これが二つ目の出来事だ。それでこの後ジャグジーたちを探そうということで食堂車から出たんだよ。

その後は銃声に従って行ってみたら大男がいてジャグジーの仲間だって事を知ったり、ジャグジーが殺されたと思って行った貨物車では誰も死んでいなかったり様々だったよ。

今のところ死体は黒服と白服ぐらいだったよ。いや～さすがにジャグジーとかその仲間が死んでたら目覚め悪いぜ。

ダイジェスト終了！

ダイジェストになってなかったか？まあいい。

そんなわけで今ジャグジーたちと貨物車にいるわけよ。

「そうか解ったぞ！　この列車の中は今や『三国志』ってわけだな！」

「東洋最大の三角関係だね！」

「今まで説明聞いてて反応がそれか？」

白服と黒服と『路線の影をなぞる者』の三角関係がね～……。まったく当てはまらないんだが……。

「サンゴクシ？」

あれ？ジャグジーたちは知らないのか……。そういえば史実としては男と書かれてるけどみんな美少女なんだよね……。

あれか？格好いいほうがいいという考えか？真名の考えも廃れたしな……。

「ああ、三国志ってのは中国の有名な歴史さ！　凄いサムライが国を三つに分けて睨(にら)みあったって話よ！　えーと、『ソーソー』と『リュービ』と『エンショー』だったかな！」

「よく蛇と蛞蝓(なめくじ)と蛙に例えられるよね！」

「色々おかしいぞ！　袁紹が台頭したのはもう少し前だし、孫堅……この時は孫権か？　それに蛇と蛞蝓と蛙じゃなくて青龍と朱雀と白虎だ！」

知識があるのは良い事なんだがこいつらは間違って覚えてることが多いぞ……。

「この列車っていう盆の上には今、黒服と白服と『路線の影をなぞる者』が居て睨み合ってるわけだろ？　そこでジャグジー！　あんたはこのバランスを崩して、盆ごと全部ひっくり返しちまえばいい

！」

「それで列車をぜーんぶ乗っ取っちゃｒばいいの！　王様だね！　殿様だね！　皇帝陛下だね！　暴君だね！」

「暴君だとそいつらと同じになっちまうぞ？」

「え、えええッ？」

なんかジャグジーが許容量オーバーしてんぞ？　でも闘（たたか）う気心はあるようだな……。

「で、でも、そんな事できるんですか？」

「大丈夫！　三国志でも最後はそうやって東洋を統一した凄い奴がいるんだから！」

？！

「チャンピオンだね！」

「だからジャグジー！　あんたは『義経』になれ！」

「ミナモトだね！」

……今は突っ込みを堪えろ……。今は良い所（？）なんだから……。

「よ、ヨシツネ？」

「ああ、義経さ！　こいつは日本から中国に渉(わた)って、その三国を倒して『チンギスハン』って国を造った凄い奴さ！」

「凄ぉい！」

色々と可笑(おか)しい……。誰だよアイザックに合ってる様な間違ってること教えてる奴は……。

それともアイザックが婉曲(えんきょく)して覚えてるのか！？

「ま、待って下さい！　何処に行く気ですか？」

考え事してるうちにここを出て行くことになったようだ。

「何処って、『線路の影をなぞる者』を探しにさ」

「なあに、『線路の影をなぞる者』なんか、俺の百丁拳銃で蜂の巣にしてやるさ！」

「アイザック、かっこいい！」

「百丁どころか、丸腰じゃないですか……」

「確かにそうだな。こいつは気が付かなかった」

「おいおい、持ち込んでたらこの列車に乗れないだろ」

白服と黒服は隠しこんで積み込んだようだがな。

「大丈夫さ。昔のえらいガンマンがこんな事を言った」

「――――『銃は、みんなの心の中にある』」

そんなことを言ってアイザックとミリア、ハーリーは貨物列車から出た。

列車の中は苛烈（かれつ）さをました。そのなかでアイザックは見事、黒服と『線路の影をなぞる物』を撃退した。

白服は『線路の影をなぞる者』に撃退されたのだが……。こうしてアイザックの言葉が実現の物となった。

因みにその頃のアイザックとミリアは空を”飛んで”いた。

比喩ではなく、言葉通りの意味である。

男の子を救うために命がけでロープに掴まっていた。列車の外にたなびくろーぷを……。

その後、アイザックとミリア、ハーリーの集団や不良集団などは無事に駅のホームにたどり着いたのだった。

そうそう、『線路の影をなぞる者』は撃退されたけど、それを『役割（ロール）』していた者もしっかりと帰ってきましたよ。

「あいつらとは偶々（たまたま）出逢っただけだったんだが中々面白かったな……。『銃はみんなの心の中に』……か。また会いに来るか！」

この物語はこれでお終い。みんなの心の中に色々な思いを芽吹かせながら……。

『とある情報屋の語り』

「お話はこれでお終いです。どうでしたか？　面白かったでしょうか？　・・・　・・・　それならば重畳（ちょうじょう）です。
次はそちらのお話を聞かせてもらいたいのですが……。・・・　・・・
・　そうですか、わかりました。ならばまた明日にでも来てください。お待ちしております。」

『空飛ぶ禁酒屋』？（後書き）

ＢＡＣＣＡＮＯ！編終わりました！！ちょっと無理やり略したように見えるかもしれませんが、その通りなのでご了承ください（苦笑）恋姫の設定を出しましたが本編で出るかは未定です。

次は今まで出て来た武器やアニメの説明を入れた後に大戦編に入るのかな？

誤字・脱字、感想等がありましたらお願いします。

地震で亡くなった方に冥福を奉げます。

私にはこんな陳腐でありきたりな言葉しか言えませんが、風邪や怪我にお気をつけて貰いたいと切に願うばかりです。

説明・解説（前書き）

今回は出て来た武器と小説とゲームの説明です。

ｗｉｋｉ多様しております。

説明・解説

〜エヌマ・エリシュ〜
要はマルドゥク神の物語本です。
この小説においてはＦａｔｅのギルガメッシュの武器を持ってきました。（ハーリーと友なので……）
その一本だけで世界を滅ぼすほどの暴風が起こせる剣だと思ってください。
しかし、剣というにはお粗末な物で、なんというか見た目は棍棒のような物です。

〜クー・フーリン〜
クー・フーリン（Ｃ？　Ｃｈｕｌａｉｎｎ）は、ケルト神話の半神半人の英雄。クー・フラン、クー・フリン、ク・ホリン、クー・ハランとも。
父は太陽神ルーもしくはＳｕａｌｔａｍ　Ｍａｃ　Ｒｏｔｈ、母はコノア王の妹デヒテラ。　幼名はセタンタ（Ｓｅｔａｎｔａ）。
灰色のマハ（Ｍａｃｈａ）と黒色のセングレン（Ｓａｉｎｇｌａｉｎ）の二頭の馬が引くチャリオットに乗ります。
美しい容貌だが、いざ戦いが始まると激しく痙攣し、あごが頭くらいの大きさになり、逆立つ髪から血が滴たたるほどの恐ろしい形相に変貌するといいます。

幼少期の逸話としてはクランと言う鍛冶屋の番犬を殺してしまい、自分が番犬の代わりとして勤めました。それで、クランの猛犬の異名を手に入れました。
そして、犬の肉は食べないと言う誓約（ゲッシュ）を立てました。このことから

義理堅い正確だとわかります。

青年期は過酷な修行を遂げ、一人ゲイボルグを授かる程の腕前を見せました。しかし、クーリーの牛争いに端を発するコノートの女王メイヴとの戦いで、修業時代の親友フェルディアをゲイボルグで殺してしまいます（また、彼を訪ねてきた息子コンラをやはりゲイボルグで殺してしまいます）。

禁忌（ゲッシュ）を破り半身が痺れたところを敵に奪われたゲイボルグに刺し貫かれて命を落としますが、その際、こぼれ落ちた内臓を水で洗って腹におさめ、石柱に己の体を縛りつけ、最後まで倒れることがなかった男の中の男です。

～ゲイ・ボルグ～

ガエ・ブルグ、ガエ・ボルガ（Ｇ？ｅ　Ｂｕｌｇ，　Ｇ？ｅ　Ｂｏｌｇａ）などとも言われています。

２頭の海獣「Ｃｏｉｎｃｈｅｎｎ」と「Ｃｕｒｒｕｉｄ」が争い、敗れた方の骨をつかってボルグ・マク・ブアインがこの槍を作り上げました。

その後、影の国の女王スカアハによって若きクー・フーリンに授けられます。

ゲイ・ボルグは銛のような形状をしており、投げれば３０の鏃となって降り注ぎ、突けば３０の棘となって破裂します。

その為この武器を紹介するときに銃の項目でなされる事もあります。

　クー・フーリンはこの槍を足を使って投擲したと言われており、ゲイ・ボルグを槍の名ではなくこの投擲法の名とする説もあります。

更にこの小説ではＦａｔｅの能力もあるものとします。

Ｆａｔｅでのゲイ・ボルグの能力は因果逆転です。つまり、槍で刺

突した時、心臓に”刺す”ではなく心臓に”刺さっている”ということになります。
物事を行うときにはまず過程が存在します。そしてその次に初めて結果が出るのだが、この槍は過程をすっ飛ばして結果に行き着きます。（まあ武器の名前叫んだときだけですが）

～ゲイ・ジャルグ　ゲイ・ボウ～
ディルムッド・オディナが使う武器。因みに剣も二つ持っています。
ゲイ・ジャルグは赤槍でゲイ・ボウは黄槍です。

こちらは記述が少ないのでＦａｔｅのものとさせて頂きます。
ゲイ・ジャルグは魔術封じの槍です。そして、※その魔術に対して槍が触れていなければ効果は発揮されません。
しかし、この武器も使用者の力量以上の魔術（魔法）には打ち負けます。

ゲイ・ボウは相手につけた傷は使用者の※死亡、又はその槍が折れない限り癒すことができないというえげつない武器です。

～アイギスの盾～

～アイギス～
アイギスとは、ギリシア神話において主神ゼウスが娘の女神アテーナーに与えた防具です。
ありとあらゆる邪悪・災厄を払う魔除けの能力を持つとされています。

鍛冶神ヘーパイストスによって作られたとされ、形状は楯であるとも、肩当てまたは胸当てのようなものであるとも言われています。なお、「アイギス」とは元々、山羊皮を使用した防具全般を指す名称でした。
英語読みはイージス（Ａｅｇｉｓ）であり、日本語ではその他、アイジス、エイジス、エージス等の呼称、表記もされます。

アイギスの盾とはメドゥーサ退治の時に使われた盾です。元は唯の鉄の盾だったのだが、鏡のように磨き、メドゥーサの石化の眼を跳ね返すことに成功しました。
そして、倒したメドゥーサの首をアイギスの盾にはめ込みました。この事から本作では、魔術（魔法）を跳ね返すという霊装効果と、相手を石化させるという二面の能力を持つことになりました。

～デュランダル～
デュランダル　（Ｄｕｒａｎｄａｌ）　は、フランスの叙事詩『ローランの歌』に登場する英雄・ローランが持つ聖剣の名前です。イタリア語読みでドゥリンダナ　（Ｄｕｒｉｎｄａｎａ）　とも読まれ、デュランダーナとも呼ばれます。不滅の刃の意。
由来には幾つか説があり、ローランの歌では天使からシャルル王に渡すように授けられ、その後シャルル王からローランに授けられた剣として登場し、『狂えるオルランド』では『イーリアス』に登場するトロイアの英雄ヘクトールが使っていた剣とされます。語源は不明だが、アラビア語起源だという説もあります。

『ローランの歌』の作中では「切れ味の鋭さデュランダルに如くもの無し」とローランが誇るほどの切れ味を見せます。
『ローランの歌』では、ロンスヴァルの谷で敵に襲われ瀕死の状態

となったローランが、デュランダルが敵の手に渡ることを恐れて岩（もしくは大理石）に叩きつけて折ろうとするが、剣は岩を両断して折れなかったというエピソードが有名。

〜ミョルニル〜

ミョルニルとは、北欧神話に登場するトールが持つ北欧神話中最強の鎚（ウォーハンマー）です。その名前は古ノルド語で「打ち砕くもの」を意味します。

ミョルニルはドワーフの兄弟ブロックとエイトリ（シンドリ）が作り上げたもので、多くの神話でトールはミョルニルをもちいて巨人を撃ち殺しています。

その威力は凄まじく、一撃で死亡しなかった生物は世界蛇ヨルムンガンドぐらいです。

ミョルニルを扱うためにはメギンギョルズという力帯と、ヤールングレイプルという鉄製の籠手が必要で、トールとその息子のマグニくらいにしか扱えません。

因みにハーリーは半分神鳥なので扱うことが出来る設定です。

投げれば相手を打った後に再び手元に戻り、大きさも自在に変えることができるとされます。掲げることで雷を呼び出すこともできます。

〜あやかしびと〜

ストーリー

第二次世界大戦後、世界中で通常ではあり得ない力、性癖、容姿をもつ人間たちが現れるようになった。
これらは一括してある病気と規定され、これに罹患したものは俗に「人妖」と呼称された。
各国の政府は人妖病患者をありとあらゆる方法で取り締まる事となる。
そして、現代。武部涼一は人妖の能力を発現させ、その能力が危険であるとされ孤島の病院への隔離を余儀なくされていた。
特に問題を起こすことなく病院で生活していた彼であったが、そこで彼は「すず」という少女と出会う。
涼一はある時に事件を起こし、病院をすずと共に脱走することになる。
脱走後、二人は逃げるために如月双七、如月すずと名を変え、人妖が人口の殆どを占める「人妖都市・神沢」に潜り込んだ。
そこで憧れていた平穏な日常や学生生活を手に入れられた双七だったが、すずの『ある秘密』を目的とし、政府機関や邪な存在たちが彼らを付け狙う。

八咫烏（やたがらす）

３０００年以上生きているといわれる存在。もはや妖怪というより神に近い存在である。
その割には容姿も性格も子供っぽいので、周りからは割とぞんざいな扱いを受けている。とある政治家の屋敷に住んでいる。

烏天狗（からすてんぐ）

八咫烏の側近で、１０００年以上生きている。一対多の戦闘に特化し、神速の攻撃を特徴とする八咫雷天流という武術を修得している。
かつて遮那王丸（源義経の幼名）に付き従ったことがある。

～ＢＡＣＣＡＮＯ！～

ストーリー

３００年前、洋上の船アドウェナ・アウィス号で錬金術師達が、不老不死を求めて悪魔の召喚を試みた。
召喚は成功し、悪魔は不老不死になる酒を錬金術師たちに与え、その酒の製造法を召喚主のマイザー・アヴァーロに教えた。
しかし、翌日の夜、１人の錬金術師が仲間を喰い始め、彼ら不老不死となった錬金術師達は、その魔手から逃れるために、世界中に散らばった。
そして１９３０年、禁酒法時代のアメリカで不死の酒を巡る馬鹿騒ぎ（バッカーノ）が始まる。

１９３１　Ｔｈｅ　Ｇｒａｎｄ　Ｐｕｎｋ　Ｒａｉｌｒｏａｄ
シカゴ発の大陸横断鉄道フライング・プッシーフット号が占拠された。
リーダーの解放を望むテロリスト組織「幽霊」、殺人鬼ラッドが率いる「白服集団」、貨物の強奪を狙うジャグジー一味、３つの集団が同時に列車強盗を起こし、都市伝説の怪物「レイルトレーサー」や数人の不死者、正体不明の男女が動き出す。
無数の思惑と行動が絡み合って列車はニューヨークに到着、乗客達はそれぞれの待ち人を目指す。

アイザック・ディアン（ＩＳＡＡＣ　ＤＩＡＮ）
ミリアの恋人。本作の狂言回し的存在。不死者。

底抜けにポジティブな言動で周囲を振り回し、結果的に多くの人物を幸福にするトリックスター。
フィーロの昇進式に紛れ込んで以来、マルティージョ・ファミリーと仲が良い。時に鋭い洞察力や機転を見せる。

ミリア・ハーヴェント（ＭＩＲＩＡ　ＨＡＲＶＥＮＴ）
アイザックの恋人。不死者。
アイザックと同じく底抜けにポジティブで破天荒な言動をとるが、辛い過去があるらしく、時折深い思慮をのぞかせる。
自分や周囲の状況を正確に把握し、ロニー（悪魔）の正体すら感づいているような描写もあるが詳細不明。

ジャグジー一味
ルッソ・ファミリーから逃れるためにＮＹに移って来た少年ギャング集団。
元は密造酒をこっそり売っていたジャグジーを慕い集まった一団で、マフィアが牽制にくるほどの勢力を持つ。

ジャグジー・スプロット（ＪＡＣＵＺＺＩ　ＳＰＬＯＴ）
リーダー。顔に剣の入れ墨をした少年。ニースの幼馴染で恋人。
臆病で泣き虫だが温和で、いざという時は計り知れない行動力を見せ、その時は決して泣かない。
入れ墨は視力の殆どないニースが見分けられるように掘ったもの。
チェスワフの新型爆薬を狙ってフライング・プッシーフット号事件に関わり、結果的に解決する。
生き別れの弟と従姉妹がいるが、母親はいない。

ニース・ホーリーストーン（ＮＩＣＥ　ＨＯＬＹＳＴＯＮＥ）
ジャグジーの幼馴染で恋人。眼帯に眼鏡をした大きな火傷のある少女。
天性の爆弾狂で、何かと爆破しようとする。幼い頃に爆弾の暴発で片目が失明、もう片方も殆ど視力を失う。最近は日本の花火にこる。２０００年代では多くの親族に恵まれるが、過去のトラブルからマルティージョ・ファミリーに関わらないよう言い聞かせる。が、曾孫には効果がなかった。

Ｆａｔｅのステータス表のようにハーリーをあらわして見ます。

真名：ハーリー・Ｂ・ホリック
性別：男性
身長・体重：１６３ｃｍ　４７ｋｇ
属性：混沌・善

筋力：Ｄ（ＥＸ）
魔力：Ｂ
耐久：Ｃ
幸運：Ｃ
敏捷：Ｂ＋
宝具：ＥＸ

筋力はスキルにて修正。
耐久は肉体においてＥＸ。死を無効化するが一旦死ぬことにはなるのでランクＣの位置づけ。

保有スキル

神性：Ａ＋＋　最大の神霊適性を持つ
心眼（真）：Ａ　修行・修練によって培った洞察力。
武術：Ｃ　八咫雷天流継承。
製作；Ａ＋　工房があれば一級品の武器や道具を作ることが出来る。
不死身：Ａ＋＋　半神鳥の作用。ありとあらゆる死がなくなる。（石化なども無効化する）
神鳥化：Ａ＋＋　半神鳥の作用。体を神鳥にすることが出来る。
絆：Ｂ＋（Ａ）　誰とでも仲良くなることが出来る。しかし、ハーリー自身が嫌うのであれば効果はなくなる。
筋力増幅：Ｂ　とある一族から教わった。持てない物がなくなるほどである。しかし、常時ではなく自分の望んだときのみ。
神道：Ｂ　悪を払い、禊を行ったり、攻撃することが出来る。
気配遮断：Ｂ　忍び経験から培った。
言語解釈：Ａ＋＋　今まで生きてきて、自然と備わった能力。
精神模倣：Ｃ　所謂物まね。芸もここまでくればスキルとなる。Ｂ以上になれば言動だけでなくスキルも模倣できる（劣化はする）がハーリーはその境地に昇っていない。

宝具

王の財宝：Ｅ～Ａ＋＋　空間を歪めた四次元の空間。ギルガメッシュの持つ物とは異なり射出はできない。ので、　ではあるが＝ではない。
空を駆ける者：ＥＸ　地上に居る物に空から神鳥の姿で突撃する。地上にあるものを焼き尽くすほどである。

今後は更に増えるかも？←訂正　増えます。

説明・解説（後書き）

ハーリーのステータスやばいｗ

グラムサイト2様への返信です。
確かにちょっと離れてるかもしれません。しかし、この小説は一応転生ものではないので、ちょくちょくこういうネタを入れていけば使っても不自然にならないんじゃないか？と思ったからです。
ネギまには次から入ります。（ネギは大戦編なので出てきませんが……）入ることが遅くなったことには謝るしかありません。ｏｒｚ

※はＷｈｉｔｅ　Ｓｅａｌ様からの訂正です。本当にありがとうございました。

解らないことや知りたいこと、誤字・脱字や感想がありましたら感想のほうにお願いします。
今回から後書きだけに感想を返すのでなく、書いてくれた方にも直接返そうと思います。　ちょくちょく変わってしまって申し訳ありません。

泡沫の夢（前書き）

大戦編の冒頭部分です。本編読み直さないと全然覚えてない……w

泡沫の夢

『とある少女の見た夢』

これは夢なのかの？　それがなんとなくわかるのじゃ。確か明晰夢って言ったかの？
こんな場所見たこと無いし……。ここはどこなのじゃ？

少女が裸でポツーンと立っている。
地面は水の上に立っている感じで、少女が足を動かす度に波紋が生まれる。
見渡す限りそんな風景が続いており、空は青の絵の具に白い絵の具を混ぜた色をしている。

取り合えず何か探そうかの！　なんでこんな夢を見てるのか解らないのじゃが、何か意味があるかもしれないのじゃ。
でも見渡す限り何も無いし……何処に歩いていこうかの？

少女は当ても無く歩き始めた。その度に綺麗な波紋が生まれた。

・　・
・

・・・・・

歩き始めてどの位経ったのだろうか。波紋が起こること意外何も変わらない風景の中で少女は歩き続けた。
ふと少女は立ち止まると空を仰いだ。すると、急に空の色が赤く、紅く成っていった。

何じゃ！？　何が起こっているのじゃ！？
急に空の色が変わり始めて……。それに寒くなってきたのじゃ！

少女は少しパニックに陥り、その場から走り出す。するとどうだろうか。
空の色は紅に黒を足した色に。地面は漆黒その物に変わっていった。

どうしてじゃ！？　さっきまであんなに綺麗な色をしていたのだぞ！！
妾はどうすればいいのじゃ！　とにかくこんな所に居たくないのじゃ！！

少女は益々パニックに陥り、本気で走り始めた。
どれだけ走っただろうか。少女の体力なので尽きるのはもう直ぐ其

処だろう。
そんな時に少女の頭に声が響いてきた。
――そんなに慌ててどうしたんだい？――
少女は思わず立ち止まった。周りのことなど忘れてその声に聞き入った。
――疲れているだろうに……そんなに慌ててどうしたんだい？――
周りがこんな景色だからじゃ！
――確かに見る分には怖いかもしれない。けどさ、何もされてはいないだろう？――
何もされてなくても怖いからの……。
――そっか。でもこの風景はいずれ起こることだよ？――
いずれ……起こること？　どういうことじゃ！

――それは言えないんだ……ごめんね――

妾はどうすればいいのじゃ？

――キミはこの後選択を迫られる――

選択……かの？

――そう、キミだけのね？　僕が言える事は気休めかもしれないけど、自分の正直な心に従って欲しいって事なんだ。誰でもない、キミのだ！――

そう声が言い終わると同時に少女の後ろの風景が壊れていった。
そして、尚も少女に近づいてきている。

何じゃ？！　何が起こっているのじゃ！？

――走って逃げるんだ！！　早く！！――

その声につられる様に少女は走り出した。
そして、走り続けていると目の前に二つの石版が現れた。

一つは、翼の下に5つの羽が舞っている絵が描かれた物が。

もう一つは、大きな鳥に、様々な武器が鎮座している絵が描かれた物が。

――――選ぶんだ！　そうすればこの夢から出られる！――――

少女は一つの石版に近寄り手を伸ばした。するとどうだろうか。意思を持っているかのように輝きだした。

――――がんばって！　僕はいつでも応援しているよ……――――

石版の光で少女が閉じていた眼を開けると、地面は草原で空は青空に変わっていた。

「君が俺を呼んだのか？」

少女の前には気が付くと赤髪の少年が立っていた。

「お前は誰じゃ？」

「俺の名前はハーリー、君は？」

「妾の名前はテオドラじゃ！」

少年は、少し思案顔をした後、少女にこう言い出した。

「テオドラ……う～ん、テオでいいかな？　テオ、俺がここに呼ばれたって事はこういうことなんだと思う」

そう言うと、少年は片膝立ちになり、頭（こうべ）を垂れ、こう言った。

「テオドラ様、私（わたくし）ことハーリー・B・ホリックはあなた様の騎士（ナイト）となり、J（ジェイ）を遂行します」

「騎士？　J？　いったいどういうことじゃ？」

少年は少女に微笑みかけながら少女に語り聞かせるように言った。

「詳しいことは気にしなくていいよ。所詮は夢だ。　でもね、俺は君を助ける守護者となるよ！」

少年が屈託無い笑顔を向けると、少女の意識は急速になくなっていった。

「今日はもうお別れみたいだね。また、今度は現実で会おっか」

少女の視界は黒く暗転して行き……

眼が覚めた。

泡沫の夢（後書き）

テオの口調難しい！　あんまり気にしないでいただけるとありがたいです。

ハーリーは相手によって口調を変えます。物真似も入れていくので安定しないと思いますがご了承ください。

誤字・脱字、感想等がございましたらよろしくお願いします。

泡沫の夢　Another Story（前書き）

今回は前回の裏ストーリです。
なかなか執筆出来ない……orz
因みに「泡沫」とかいて「うたかた」と読みます。

泡沫の夢　Another Story

〜夢世界にて〜

――やぁ、初めましてだね――

お前か？　俺をこの世界に呼んだのは？

――君は驚かないんだね――

こんなことは魔術に精通していれば出来ることだ。
現に俺だってやろうと思えば出来る。しかも、俺達とは違う系統の”魔法”を使う奴らも似たようなこと出来るんじゃねーか？

――ふふっ、違いない――

で、お前は誰なんだ？　俺をこの世界……仮に”Dream World”とでも名づけておこうか……。
Dream Worldに呼び出したんだ。俺のことはわかってるんだろ？

――ああ、もちろん。僕のことは後で話すよ――

ふ～ん、それで用件は？

――これから”彼女”に会ってもらって、彼女を守護して欲しいんだ――

彼女？　それに何故俺なんだ？

――鳥とはいえ、誕生と消滅を司る神鳥の遺伝子を持ちし……今は人間としておこうか、そんな人間が居たんだ。それに……――

それに？

――君に頼むしかないと……何故かそう思ったんだ――

俺に？　確かに俺の大本は人とフェニックスの混合種だ。
しかし、フェニックスは神であると同時に悪魔でもある、とされているぞ？

――そんなことは関係ないよ？　それにね、勘っていうのはよく

当たるよ？――――

クククッ！　アハハハハ！！　良いね！　善いね！！
勘！　確かに勘を無礼（なめ）るのはよくねぇな！
それで？　彼女ってのは誰だ？

――――彼女って言うのは……！？　拙い！――――

どうした？　何があった？……反応ねーな。
これは向こうに、もしくは彼女に何かあったとみていいだろう。
……何だ！？　急に光り始めて……？

――――やっぱり彼女は君を選んだ！　今は彼女に会って上げて？――――

・・・・

・・・

光が晴れて目を開けると少女が立っていた。
少女は目を瞑(つむ)っており、縋(すが)る様に手を前に伸ばしていた。
そして、名も知らぬ少女はゆっくりと目を開いた。

あの声が言っているのはこの少女のことだろうな。
褐色の肌で、今は幼さが強いが将来はきっと美人になるであろうことを容易に考えさせる容姿だな。
まあいいだろう。　どうでもいい奴だったら無視していたが、強き信念も内に秘めてそうだし……合格だ。

「君が俺を呼んだのか？」

戸惑ってるが、錯乱もしてないし……気に入った！

「お前は誰じゃ？」

随分爺臭い……この場合婆臭いって言うのか？　年にあってない喋り方するな？　まあいいか。

「俺の名前はハーリー、君は？」

「妾の名前はテオドラじゃ！」

妾……ね、それなりに高い地位にいるみたいだな。まあそれは置いておこう。

「テオドラ……う～ん、テオでいいかな？　テオ、俺がここに呼ばれたって事はこういうことなんだと思う」

テオになら俺は全てを賭けて守ることが出来るだろうさ！　だから俺はこの言葉を贈ろう。

「テオドラ様、私（わたくし）ことハーリー・B・ホリックはあなた様の騎士（ナイト）となり、J（ジェイ）を遂行します」

「騎士？　J？　いったいどういうことじゃ？」

まあ普通解らないよな……。

「詳しいことは気にしなくていいよ。所詮は夢だ。　でもね、俺は君を助ける守護者となるよ！」

ってテオが消えてる！？　……意識が覚醒してるってことね。

――――ありがとう――――

お前か……。気にするな、俺もテオの事気に入ったからな！

――やっぱり君に頼んでよかったよ――

で？　お前さんは誰……いや、何だ？

――？！　よくわかったね……――

勘だ勘！　って言うのは嘘で、人のような気がしなかたったからな。妖(およずれ)の類だろ？

――そうだよ。僕は優しい少女に助けられた妖だよ。彼女は覚えてないだろうけどね……――

それで恩返しのつもりでか？

――そんな大層な物じゃないよ……。彼女には幸せになって欲しいだけ――

……お前さんも気に入ったよ。　後で一緒に酒でも飲もうぜ！

――それもいいね！　まあそれは後で考えて……まずは彼女のことをよろしくね？――

任せとけよ。言っただろ？　俺はテオを気に入ったってな！

――それじゃ、また会おうね！――

ああ！　縁が「合ったら」、また会おう。

泡沫の夢　Another Story（後書き）

遅くなってすいません。
まあのんびり投稿なので偶に覗いてもらえれば幸いです。

ハーリーはこれから口調が激しく変わるので次から『』で書こうと思います。

後、ハーリーは大戦編が終わったらキャラがガラリと変わります。
（理由はアイザックに出会ってこんな風に人を笑わせたい、と思うようになるからです。）
まぁしばらく関係ないですけどw

誤字・脱字、感想がありましたらよろしくおねがいします。

主従の邂逅（前書き）

最近一ヶ月更新になってるな～
いや～もうちょい早くしたいんですけど暇がなくて…

３４巻読んだけど凄いことになってますねｗ
属性ごとのフェイトモドキがｗｗｗその内銀河属性とか出てくるのかな？
全属性持っているぜ！　これで完全なる世界の勝利だ（キリッみたいなｗｗｗ

邂逅の意味は偶然出会うことという意味ですが、巡り回ってハーリーとテオが出会ったってことでつけました。

主従の邂逅

さ～てと、頼まれごともしたし、テオに会いに行くとしますか。
別に頼まれなくても会いに行ったと思うがね……。まあ何処にいる姫さんかわかんないし取りあえず聞き込みかな？

・　・　・　・　・

「テオドラ様か？　お前帝国に居るのにそんなことも知らんのか？」
『ここでは有名なんですか？　いや～つい最近こっちに来たので……』
「そうだったか。テオドラ様はここ、ヘラス帝国の第三皇女だぞ」
位が高い姫さんだとは思っていたけどまさかここまでとは思わなかったな……。
言われてみればそんな感じだったか？　まだ幼さが強すぎるが……。
『そうですか、ありがとうございます。これはチップです、今日の

分の足しにでもしてください』

「おいおい、嬉しいけどいいのか？」

『構いませんよ』

じゃまさっそく向かうとするか……でもどうやって入ろう？

～とある城にて～

side　テオドラ

まったく！　どいつもこいつも戦争をしたがりおる！！
そんなものそこらへんに捨ててしまえ！！

「テオドラ様、昼食はいかがいたしましょうか」

「今日は気分が優れん。料理長にはすまないが下げてもらってくれ」

「かしこまりました」

どうしたものかの～？　妾だけが何か言っても取り合ってもらえぬ。
なにか切っ掛けが掴めぬものかの？

「ハァ～」

『（どうした？　お嬢さん。ため息なんかついちゃって）』

「！？　誰じゃ！」

辺りを見回してみても何も……いや窓枠に綺麗な鳥が止まって居るの……。

『（まぁまぁそんな慌てなさんな！　ちょっと待ってろ）』

！？　急に鳥が光り始めて……！？

side　out

『よ！　俺の事覚えてるか？』

おーおー吃驚してるなこりゃ。

「お、お主は確か……む～」

『その様子だと見覚えはあるけどなんだか覚えだせないって感じだな』

「む……一度会った者を忘れるなど無礼以外の何物でもない。ちょっと待ってくれんかの？　直ぐに思い出す」

その心意気やよし！　でもたぶん無理じゃねーか？　夢ってのは難しい物だからな……

「……夢で、会ったかの？」

！？　度々（たびたび）驚かしてくれるな～。

『正解！　よくわかったな。』

「なんとなく……ぼんやりとした物が浮かんできただけじゃ」

『そっか、じゃあまた自己紹介しよう。俺の名前はハーリーだ』

「名乗られたからには返せねばの。知っとると思うが、妾の名前はテオドラじゃ」

『解ったよ。さて、テオ。お前は夢のことを覚えているんだな？』

「漠然（ばくぜん）と……ではあるがの」

『それなら話は早い。お前は俺に何をして欲しい？　人を殺すこと？　敵を殲滅すること？　敵軍を破壊すること？』

何を選ぶ？　俺はお前のためなら何でもしてやるぜ？

「妾が望むことは……」

例え何を選んだとしてもな……。

「望むことは……」

お前は俺の気に入った奴だからな！

「そのどちらでもない！」

『じゃあ何を俺に頼む？』

「妾はお主に我が騎士を命ずる！　人を殺すのではなく助けるために手を差し伸べるのじゃ！！」

『それが例え人を殺すことになってもか？』

「ただ人を殺すことと、助けるために人を殺すのは似ているようで違う物と考えておる。それが他人に屁理屈と言われようともじゃ！」

『屁理屈も立派な理屈だ。それにこのような問いには答えはない。テオがその考えを信じ通せたらそれが答えに昇華するんだよ』

「お主それが解っておって妾を試したな！」

『主人（マスター）のことを知っておかなければ俺も力を奮うことが出来ないか

らな』

殺せと言われてただ殺すだけならそこらへんに居る三流以下にでもできる。
主人のためにいかに効率よく、また被害を出さず出来るか考え、行動できて初めて一人前になれる。

「では妾もお主に聞きたい。お主は強いのか？」

『おいおい、俺を騎士にしといて聞くか？　そうだな……今話題の紅き翼位（アラルブラ）なら倒せるぞ？』

「それなら魔法使い最強と言われても過言ではないではないか！！」

あれ？　言ってなかったか？

『ああ、俺魔法も少し使えるけど魔法使いじゃないぞ？』

「ん？　どういうことかの？」

『俺は魔法使い（マギ）ではなく魔術師（メイガス）だ』

「魔術師？　どう違うのじゃ？」

どう違う……ね。
どう説明したら伝わるのかね～？

『そもそも根本からして違う、としか言えないな。俺たち魔術師の

魔法使いの定義と、この魔法世界に住んでいる奴らの魔法使いの定義は違うからな……』

「むむむ……」

『それに俺は魔術だけじゃなくて体術や武器もバリバリ使うからな』

「体術や武器を使う者は魔法使いにもいるぞ？」

『体術はとある人たちから教わった特殊な物でね？　それに武器も特殊”すぎる”んだ』

「すぎる……とはどういうことかの？」

やっぱり気になるか……。

別に見せてやってもいいけど、真名開放しなければ一概に武器と言えないものもあるし……。

『まあそれはおいおい……な？』

「む……仕方ないの。でも後で絶対見せるのじゃぞ？」

『了解したよ』

これが俺とテオとの邂逅の一ページ

主従の邂逅（後書き）

皆さんに質問です。私は結構ルビをふっているんですが邪魔ですか？
邪魔だと思う方が居ましたらなくそうと思うんですが……。

誤字・脱字、感想等がございましたらよろしくお願いします。

英雄の卵達との邂逅（前書き）

空いた時間を使いせこせこ執筆
全然内容を思い出せない！　時間軸がおかしくても気にしないで下さい……

英雄の卵達との邂逅

「オイ！　テメーは誰だ！　変な仮面つけてやがって！」

「待てナギ！　こいつは一筋縄じゃいかなそうだ！」

「フフフ、面白くなってきましたね～」

「やれやれ、この馬鹿弟子は誰彼構わず……」

唐突だが俺は紅き翼と相対してる。

ぶっちゃければ前にテオに倒せると言ったが、実際に戦ったわけじゃねーからテオに許可貰って会いに来たんだが……。

「オイこの野郎！　聞いてんのか！？」

目の前にはガキ一人と青年二人とガキなのに爺臭い喋り方をするのが一人居る……。

これが紅き翼なのか？

『人に名を尋ねるならばまずは自分からが礼儀では？』

「それもそうだな……俺の名前はナギ・スプリングフィールド！人呼んで”千の呪文の男”（サウザンド・マスター）だ！！」

以外に素直なのか？　いや……ただのガキか……。

まいいか。素直なのが悪いことじゃないからな。

「またこいつは自称してるし……」

「アンチョコ見ながら呪文唱える男が呼ばれる称号ではないのう」

「それがおもしろいんじゃないですか」

『面白い集団だな。これが紅き翼か！』

漫才コンビか？　いや、これが作戦なのか？

「オイ、ナギ！　凄く誤解されてるぞ！」

「なんだと！？」

『まあいいか。俺の名は……そうだな。この仮面にちなんで道化（クラウン）とでも呼んでもらおうか』

今俺は顔を晒したくないから仮面を付けてる。

その仮面は右半分が笑っている顔で、もう左半分は泣いてる仮面だ。

まあぶっちゃければピエロの仮面だ。理由？　お気に入りだから……かな？

「道化か……それで？　道化は何をしに来た？　こんな何も無いところに」

『いやなに。戦線からはずされているようだからちょっと紅き翼の力試しに』

「アン？　やんのか？」

「だから落ち着け！」

「頭に血が上っておるの～」

「相変わらず見ていてあきませんね～」

本当にこいつらは強いことで有名なのか？
なんか俺も仲間になって一緒に見ていたi……ハッ！？　面白そうだからつい戯言を……。
ペースを戻さなければ……。

『まあそうカッカしなさんな。じゃあルールな？　俺はこの場に立ってるからお前さん好きな呪文一つ唱えて俺をぶっ飛ばしてみ？』

「何だそのルールは？」

『まあ聞け。俺はこの薙刀を持って立ってるから、それでお前の呪文で俺が地に足以外を着いたらお前の勝ち。着かなかったら俺の勝ち。どうだ？』

「面白そうだな。その勝負乗った！」

「ナギ！　罠かもしれないぞ！？」

「それは無いでしょう詠春。仮にも有名なナギに正面きって罠を仕掛けてもいいことはない。戦場でもないので……」

「そうじゃの～、いいんじゃないかの？」

「そうと決まれば行くぞ？」

やれやれ、せっかちだこと。
まあガキだからいいんか？　あれ？　俺が枯れてるだけ！？
俺は断じて枯れてない！　……取り合えず武器を出してっと
決して現実逃避じゃないぞ？

『いつでもこい！』

「行くぜ！！　最大出力！　百重千重と重なりて走れよ稲妻　千の雷！！！」

うお！？　さすが無敵と言われるわけだぜ！
でも例え腕試しだとしてもな、俺は主（テオ）に騎士になると誓ったんだ。
こんなところで負けたら主に顔向けできねぇ！！

『《主（テオ）への忠誠を示せ！！　岩融（いわおとし）》！！』

直後轟音が響き渡った……。

side　アルビレオ・イマ

最近は暇をもてあましていましたが、今日は面白いことがおきました。
なんと単独でナギに一騎打ちを申し込みに男が来ました。
男と言いましたが正確には少年ですね。しかし、纏ってる雰囲気は

歴戦の戦士のそれです。
ちぐはぐな印象を受けましだが、それがこの少年の味なんでしょうね。
残念ながら顔は仮面で隠されて見えないんですが……。

「行くぜ！！　最大出力！　百重千重と重なりて走れよ稲妻　千の雷！！！」

おや、始まったみたいですね？　でも少年は大丈夫なのでしょうか？
ナギの攻撃を棒立ちで受けたらいくら兵(つわもの)でも死んでしまいます。
それにただ立っているだけならばあの薙刀の意味は？

『《主(テオ)への忠誠を示せ！！　岩融(いわおとし)》！！』

直後轟音が響き渡りました。そして土煙が無くなったそこには……

side　out

さすが無敵と称される男、死ぬかと思ったぞ。
まあ倒れてないから俺の勝ちだよな？

「な……！？。ナギの攻撃を受けて倒れないなんて！　それに岩融って……」

「規格外の少年じゃの？」

「！？　これはさすがに私も驚きましたね」
「倒れてない……か、畜生！　俺の負けか」
ナギが頭を掻き毟る……。おいおい少年、禿になるから気をつけろ。
『俺の勝ちだな！』
「ああ、認めるよ！　だがな、今度はぜってー負けねーからな！！」
潔いのはいいことだぞ～。
「道化。お前が言った岩融ってもしかして」
ん？　この世界で知ってる奴が居るのか？
『これのことを知っているのか？』
「こいつはもともと旧世界の京都の出身らしいぞ」
なるほどね～。京都、更に剣士なら知ってるかもな
『なら知っているかもな。詠春さん……だっけ？　あれはたぶんあなたのご想像通りの物だ』
「！？　なぜそんな物を！！」
「おい詠春どうした？」
「そうじゃの、詠春がここまで取り乱す物なのかの？」

「確かに強い力は感じますが……」

『まあこの薙刀のことは詠春さんに聞いてくれ。俺は帰る』

「今度は負けねーから首を洗って待ってろ！」

なかなか負けん気の強い少年だこと。

いいね～、とてもいいよ！　そう来なくちゃ！！

『待っているよ。ではな』

取り合えず主のところへ帰りますか。

ｓｉｄｅ　詠春

少年は帰っていったが俺のモヤモヤは消えない。

少年が何故あの武器を持っていたのか、なぜナギの攻撃を耐え切れたのか、考えることは沢山ある。

「どうしたんだよ詠春！　ぼーとしやがって。確かに道化には負けたけど次はぜってー負けねーぞ？」

「あ、ああ。　いや、道化が使っていた武器のことを考えてたんだ」

「先程も取り乱していたようですが、あれはそんなに凄い物なんですか？」

「凄い……、いや凄い物だよ。あれは昔の将軍……って言っても解

らないか、すごく強い兵が持っていた奴だ」

「強い兵……かの？」

「ああ、凄い強い兵だ。その中でも一つ逸話があってな」

「それって何だ？」

「その兵の主は兄と一緒に戦争をして勝ったんだ。しかしだな、兄はその力を恐れて始末を自分の兵に命じたんだ」

「とんでもねーやつだな！」

「仕方ないのかもしれないですね」

「戦争なんてそんなものじゃろ。危険物を手元に置いておくなぞ、危険以外の何物でもないからの」

「それでもよ！」

根は凄くいい奴だよな、ナギは。暴走癖をなくしてくれれば……。まあいい。それは仕方ないことだから……ハァ。

「何ため息ついてんだよ！　それより続きは？」

「わかってるよ。それでな？　岩融を使う兵士とその主は追い詰められたんだ。それで、主が自害する時間を稼ぐために一人で大量の兵に立ち向かったんだ」

「自害って……自殺のことじゃねーか！」

「ああ。昔の戦争では討ち取られる位なら自害するってのが主流だったんだ。それで、その時岩融を使う兵士は奮戦してたんだが討ち取られてしまったんだ。しかし、それでも彼は決して倒れなかったらしいんだ。矢をその体に何本も受けてもな」

「す……すげぇな！」

「そんな傑物がおったとはな～」

「確かに凄いですね。その者も名前は？」

「弁慶って名前だ」

それにしても、主への忠誠を示せ……か。逸話どおりじゃないか！！あの武器はそういう媒体なのか？　益々解らん！　それでも警戒はすべきだろうな……。

side out

英雄の卵達との邂逅（後書き）

力試しの話です。
まあ遊びのような感じでしたが、ハーリーはナギの攻撃を耐え切れるほど力があるんだってことを証明するために書いた話です。

誤字・脱字、感想等がございましたらよろしくお願いします。

血の契約（前書き）

長く開いてしまったのに短いです。すいませんｏｒｚ

感想を何でもいいので書いてください！（面倒くさいのは知っていますが……）
面白いだけでもＯＫです！　逆に何処何処をこうした方がいいなどでもいいです！
まぁ強制は出来ませんが、あれば作者の喜びが天元突破ですｗｗｗ

血の契約

「ハーリー、仮契約してくれんかの？」

俺がフェンリルの毛を櫛で梳かしているときにテオが急にそんな事を言ってきた。
て言うか……何故？

『って言ってるけど……どう思うフェンリル？』

「（主よ。それは私に聞くことではないのでは？）」

フェンリルは真面目だね～。
この場合はフェンリルの方が合っているのか？

「ハッキリ答えるのじゃ！！」

『何で急にそんな事言い出したんだ？』

そんな事言い出す予兆は……心当たり無いな。

「それは……その……あれがあーなってこうなって……いいから！！　妾と仮契約をするのじゃ！！」

別にいいんだけど……誓約とか盟約とかじゃなくて仮契約ね～。
俺も”魔法”をちょっとは使うことが出来るからたぶん出来ると思うんだが……どうなんだ？

『お前はいいのか？　仮にも皇族だぞ？』

「関係ないのじゃ！　お主は妾の騎士！　それだけでも理由になるのじゃ！！　それに（ごにょごにょ」

後半は聞き取れなかったけど……まあいいか。
て言うか興味なかったから知らなかったが……どうやればいいんだ？

『どうやってやるんだ？』

「！？　いいのか？　本当にしてくれるのか？」

何だこの食いつき？
まあなんとなく理由はわかるけど。あからさま過ぎだしな～。
最近の子供はませてるね～。いや？　長命種のテオだからませてはいないのか？
……いや、外見的にはませてるな。うれしいけどな。（↑ハーリーの外見は１５歳…お前が言うな）

『ああ、いいよ。でも俺はやりかた知らないからテオがセッティングしてくれ』

「了解なのじゃ！　……って言ってもこの魔法具を地面に置くだけだがの」

準備がよろしいことで。

つーかそんなのがあるんだな……今度買いに行ってみるか。

テオドラが何かの器具を置いた途端、魔方陣がボウッと光り始めた。

見る物を高揚させる、神秘的な陣が。

綺麗だな……。

なんか似たようなのは見たことがあるけど……違うみたいだな。

何を意味してるんだ？

「何をやっているのかの？　早くこっちに来んか！」

おっと、”魔術師”の性（さが）かな？　知らない物を見ると解析したくなるんだよな。

まあいいか。お姫様もお待ちだし、契約を済まそうか。

「この円の中に入って接吻をするのじゃ！／／／」

『いいのか……っつても意味は無いか。俺は何時でもいいぞ』

俺は別に接吻……ｋｉｓｓをするのに一々ハズカシがらんぞ？
別に始めてでもねーしな。それに国によっては挨拶のところもあるし。

目を瞑って（↑様式美じゃね？）待っていると唇に柔らかい衝撃が訪れた。
そんな事をしている間に術が働き、陣が輝き始めた。
何時までするのかと考えていると、テオのほうから唇を離した。

「これでお前は妾の本当の騎士じゃ！　今まで以上に護ってもらうぞ？」

顔を真っ赤にし、はにかみながら問いかけてくる。
初々しいね～。まあ、

『了解したよ。私の主　（マイマスター）』

答えるのが騎士の仕事だよな？

「まあそれはそうとして、これを渡しておくのじゃ」

なんだこれは？　”従者のカード”？

『これは……スペアカードみたいな物か？　でもなんで俺が持つんだ？』

「それはの～、そのカードを持って”来たれ”と唱えれば武器やアイテムが使えるのじゃ！」

『ふ～ん、便利な道具だな』

取り合えずよく観察してみるか。

名前　Ｈａｒｌｅｙ　Ｂｕｒｎｉｎｇｓ　Ｈｏｌｉｃ

称号　ＪＵＳＴＩＣＥ　ＪＵＤＪＥ　ＭＡＮ　（正義の審判者）

色調　Ｂｒａｃｋ　（黒）

特性　ｊｕｓｔｉｃｅ　（正義）

方位　ｃｅｎｔｅｒ　（中央）

星辰性　Ｓｏｌ　（太陽）

アーティファクト　完成形変体刀十二本

ふむふむ、その人の本質を表しているのか……。

それに完成形変体刀十二本って！？

――――ザッ――――

お前のおかげでとがめと姉ーちゃんを助けられたよ。

――――――ザザッ――――――

これで私は役目を終えることが出来た。礼を言うぞ！

――――――――――ザッ――ザザザッ――――――――――

納得できない部分もありますが……一応ありがとう、と言っておきます。

――――ザザッ――――ザ――――――――――――――――――――――――――――――

「……ハーリー？　どうしたのじゃ？」

『ハ？！　嫌、なんでもない。少し昔を思い出していただけだ』

まさかこんなところでまた御目にかかるなんてな。

魂がこめられた武器にして、俺の”王の財宝”の中に入っていない十二本の刀……。

『ありがとな。大切にするよ』

「うむうむ。喜んでくれて何よりじゃ」

”この少女はこの戦争が終わるまでは護りきろう。”

ハーリーはさらに決意を堅くした。

血の契約（後書き）

補足：カードに書いているのは英語ですが本来はラテン語のようですね。

ラテン語はわからないので英語で書いたことをご了承ください。

刀語の結末を変えてとがめと七実が生きています。

これから受験モードになるので間がまた更に空くと思います。

しかし、投げ出すつもりはないのでこれからもよろしくお願いします。

誤字・脱字、感想等がございましたらよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3681o/

魔法先生と不死鳥

2011年10月8日03時12分発行